



赤芽柳

仙溪

花型 草型 留流し

花器 煤竹竹筒

先月号の行季柳の生花や、この赤芽柳の生花では、生け上がるまでの過程に特別な技術が必要で、その技術の習得には繰り返し練習することが大切で、それ以外の近道はない。枝の足もとの冬芽を切りとることにしても最初のうちはなかなかうまく切れないが、何度もいけているうちに、コツがわかってくる。水際がきゅっと一つに揃うまでには年数がかかるが、何度もいけるうちにすこしずつ技が身につくものだ。根気よく積み重ねることですスキルアップを目指そう。





石化柳 水仙

仙溪

花型 草型 二種挿し

花器 煤竹竹筒

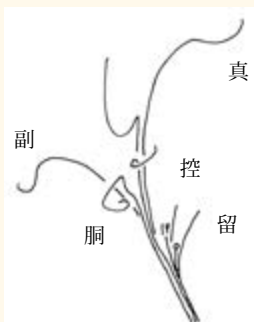
石化柳は尾上柳の園芸品種とされている。簞状に枝が帯化する植物にはこの石化柳以外にも石化金雀児があるが、どちらもしげばな花材になっている。

石化した部分は撓められる方向と撓められない方向があるので、どの役枝にむいた枝かを考えながら各枝を組み合わせてみてからいけ進める。

石化柳五本で真、真囲、見越、副、胴をつくり、水仙を葉組して留、控に加えた。

水仙の留は、足もとが水際から広がってしまいがちなので、水際をいかに細く寄せられるかがポイントとなる。

水仙以外なら、椿の留もいい。





雪柳 チューリップ

花型 二瓶飾り

花器 主瓶 煤竹竹筒

副瓶 結晶釉小型水盤

春の生花二瓶飾りの作例。

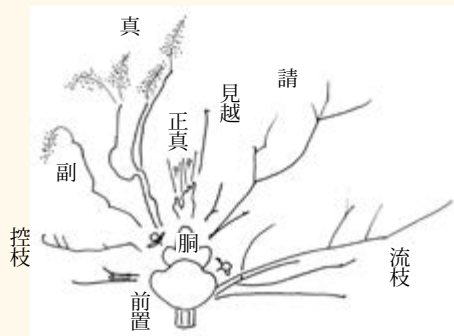
雪柳は折れやすいので、もとの枝の湾曲を生かすようにする。

いけたのが一月なので細枝で形をつくるのに苦労したが、太枝にたっぷり花のついた雪柳を見つけていければいいやすい。

その場合、花屋で枝を選ばせてもらえるなら、上方でよく曲がった枝を、右向き左向きを組み合わせるという方がいい。

チューリップはできれば小型の、葉がしっかりしたものを選びたい。葉が柔らかいと、生花にはいけられない。





真・副 南天
 請・流枝 臘梅
 正真 水仙
 見越 苔木
 控枝・胴・前置 松
 あしらい 椿ほか

南天真の立花 仙溪
 年未年始に京都駅前に飾った立花。強風で向きが変わって困った。途中で黒いテープで花器を敷板に固定し、以後は動かず。野外は大変だが好評だったそうで京都ならではの。



啓翁桜

花型 草型 副流し
花器 青銅薄端

先月号のテキストに櫻子の新聞記事を転載したが、その中に冬の木々はすでに春の芽吹きに「備え」て準備をしているということが書かれている。その上で「何でも簡単で便利になった現代人は、それを（備え）が大切なことを忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えていて、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります」と云っている。

まことにその通りだと思う。

今年も桜の季節が近づいてきた。鴨川の染井吉野の花芽が膨らんで、薄紅色の蕾が顔を出すのももうじきだ。春はもうそこまで来ている。

啓翁桜の生花を薄端にいった。薄端は水面を広く見せることができるので、生花の水際立った美しさがより引き立って見える。





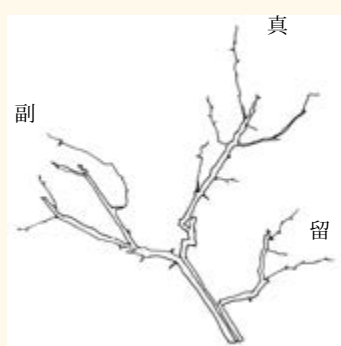
健一郎の木瓜の生花

花型 草型 副流し

花器 竜手附青銅器

一月十九日、廬山寺での父の葬儀には、祭壇の前に私の松の立花と、健一郎の木瓜の生花を供えた。木瓜には棘があるので本来は避けるべきところだが、父は健ちゃんの木瓜の生花がとても好きだったので、棘など気にせず喜んでくれたのではないかと思います。

この頁の生花がその時の木瓜の生花である。葬儀の前日の夜、私と二人でいけたのだが、私の立花も健ちゃんが手伝ってくれた。師範の竹中慶恒くんと一緒に松葉を掃除したり、合釘で枝をつけたり。今までは父の助手をつとめてきた私が、今度は私が健ちゃんを助手にする日が来たのだ。父も母も天国から見てくれていたような気がする。「おー健ちゃん、やっとうるやっとうる」そんな嬉しそうな声が聞こえる。





仙溪の松の立花

花型 行型

花器 青銅立花瓶

左の写真は今年の「冬の旅・京都名流いけばな展」の花だが、これは廬山寺での父の葬儀で祭壇の前に備えた私の松の立花を手直しして、父の花として出品させていただいたものである。

とり合わせは

松……真・副・請・流枝・前置

水仙……正真

白梅……控枝・胴

晒木……見越

寒菊……胴

紅椿……あしらい

となっている。

この立花瓶は父が大切にしていた器の一つで、広い水面からすつくと立つ水際が美しく見える器である。今後もここ一番という立花を立てる時に、大切に使用したいと思っている。



連翹 〓 8 頁の花 〓 仙溪
花型 草型 副流し
花器 陶鉢
この連翹の生花は剣山を使っている。いけたあと、剣山がかくれるまで砂利を入れておくと水際も見せ場になる。
長く伸びた細枝があったので、それを生かす工夫をして連翹らしさを出してみた。真の枝先のカーブも撓めてつくっている。
連翹は木犀科の落葉低木。中国、朝鮮半島の原産。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
5月号
No. 599

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



オクロレウカ 百合

△表紙の花▽ 仙溪

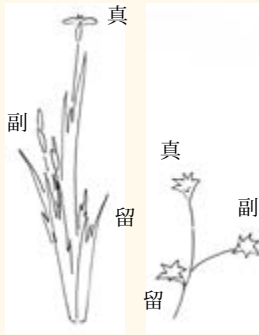
花型 生花 株分け

花材 主株 オクロレウカ（菖蒲科 あやめ）

子株 小型の百合（百合科）

オクロレウカとピンクの百合で株分け生花をいけてみた。小型の百合にはスカシユリとヒメユリをかけあわせてつくられた「プチソレイユ」というのがあるが、プチソレイユはオレンジ色で、おそらくその系統の薄紅色の品種だろう。オクロレウカの青紫色との色映りがいい。

オクロレウカの原産地はトルコ周辺だそうで、丈夫で美しい葉のほうが早くに花材となっていたが、近年花も時季には出まわっている。写真では惜しくも花が開いてないが、花菖蒲の花をシャープにしたような姿で花弁はあまり垂れない。





金雀児 えにしだ へ8頁の花 仙溪

花型 草型 留流し

花器 天女模様青銅花器

白花の金雀児を十五本使っているが、水際を細く寄せるために脇枝を掃除するのに手間がかかるのと、分かれ枝を櫛で解いたようにさばくのには根気が必要となる。

金雀児は生花以外ではあまりいけませんが日本の植物ではなく地中海沿岸原産。豆科の常緑低木で、明治期に導入され庭木や公園に植えられた。開花期は春。花色は黄色が主である。

この原稿を書いている今は「テキスト」撮影から二週間経つが、白い花がちらほらと咲きだした。水を替えているのでまだまだ綺麗に飾っておけそう。いける手間はかかるけれど、その分長く楽しめる。





京展出品作

木瓜 〆9頁の花〆 仙溪

花型 草型

花器 緑釉耳付陶コンポート

今年の華道京展には木瓜の生花を出品した。太い枝にびっしりと花が咲いて、前期と後期の六日間、目を楽しませてくれた。花展のあと大切に持ち帰って撮影したが、運ぶ間にも花が散ってしまったけれど、まだまだしつかり花が残っている。会期中は花で枝が見えないくらいだった。この木瓜はおそらく私よりも先輩だろう。せめてちゃんと写真に撮らないと罰が当たる。感謝をこめて写真に撮った。



花菖蒲

花型 行型 五花九葉

花器 陶水盤（竹内眞三郎作）

花菖蒲の見頃は六月前半から中旬だろう。端午の節句の頃はまだ本来の時期ではないので、早咲き品種のみが出まわるが、花菖蒲の品種は現存するもので二千種といわれている。とても多く多くの品種がつくられてきたわけだ。日本全国に約二百の花菖蒲園があるそうなので、季節には花見にでかけたい。

東京の明治神宮（百五十種）、大阪の城北公園（二百五十種）には行ったことがあるが、それぞれに残るものがあつた。

さて、古典いけばなでは葉組（はぐみ）というものがあつて、花菖蒲は葉株をいっただんはずしてから重ね合わせて美しい姿に形作る。最初はなかなか葉がくつつかないが、稽古を重ねるとこつがつかめるようになる。

うまく葉組ができるようになってくると、葉がのびてゆく過程に思いを馳せる余裕もできる。外側の短い葉を親葉と呼ぶが、この短い葉が最初に生まれてそこから次の葉が伸び、順々に中から生まれた葉が前の葉を追い抜いて高く伸びていく。つまり順に支えあいながらどんどん背をのびすのだ。そして葉先は互いに向き合っている。なんだかとても素敵な関係だと思いませんか。植物の「出生」には植物の生き様が見える。



桑原仙溪 立花

花菖蒲 白 濃青紫 (菖蒲科)
夏櫨 (躑躅科)
下野 薄紅色 (薔薇科)
土佐水木 (満作科)
柊の黄葉 (木犀科)

【記録】

日本いけばな芸術展 (東京)

会期 5月24日(金)~25日(土)

会場 日本橋高島屋

出品 桑原仙溪

花型 除真立花

花材 真 松

正真 紫蘭 (桃色、黄色)



副

晒木

請

五葉松

見越

晒木

控枝

松

流枝

晒木

胴

燕尾仙翁

晒木

前置

松



ジューンベリー

△11頁の花▽

仙溪

花型 二瓶飾り

主瓶 草型副流し

ジューンベリー（薔薇科）

副瓶 行型

ミニ薔薇（薔薇科）

花器 陶花瓶

ガラス小鉢

日本の中南部、四国、九州に分布するザイフリボク（采振り木）はシデザクラの別名があり、四〜五月に白くてやや細長い五弁花が咲いたあと実ができて熟すと食べられる。

ザイフリボクの仲間では北米原産のアメリカザイフリボクはジューンベリーと呼ばれ、近年果樹として栽培されてきているらしい。

花屋でジューンベリーの名前で赤い実のついた枝が売られていたので、生花にいかてみた。はじめていけたのだが、葉の水揚げもよく、これから花材として出まわるようになるだろう。一種では物足りないので、ミニ薔薇をとり合わせて二瓶飾りにした。



段江浦草 だんづくも 睡蓮 すいれん

△3頁の花▽ 仙溪

花型 株分け

主株 段江浦草 (蚊帳吊草科)

子株 睡蓮 (睡蓮科)

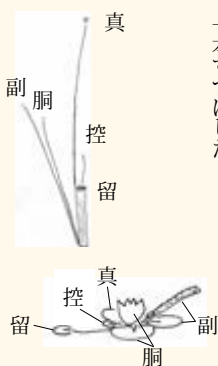
花器 陶水盤

水辺の株分け生花の作例。

主株の太蘭は縞太蘭または段江浦草と呼ばれる斑入り品種で、太蘭よりも丈は短い清涼感がある。太蘭は湿地や浅い池、沼、湖畔などに生育する多年草。長く伸びた花茎の先端に花序がつく。万葉集には太蘭草の名前で詠まれている。

太蘭の群落が風や水の動きにあわせて揺らぐ様子は風情がある。たつぷりの水をはった器にいたい。作例では切り株を留にしている。

睡蓮は池や沼の水面に浮かぶように咲く多年草。若葉は巻葉の状態水面から顔を出し、やがて広葉となるにつれて傾き倒れ、浮葉として成長する。日本には白花で小型のヒツジグサが自生し、花屋には外国種のものが切り花で出回る。水面上で生花のバランスに葉、巻葉、花を配置する。水面が小さいので花と巻葉を一本ずつにした。





七竈真の立花

△ 4頁の花▽ 仙溪

夏の立花。作例の七竈はここ数年、初夏から出回るようになったもので、よくしまった葉が半分紅葉している。自然に紅葉した七竈ではすぐに葉がだめになるが、この枝は一週間以上元気だった。

父、仙齋が続けてきた立花研修会を、今は私が引き継いでいる。立花には立花特有の花材の扱い方がありますが、私自身、その基礎が身についたと実感するまで何年もかかった。何でもそうだが、少しでも多くいける(立てる)以外に上達の近道はない。

花材

七竈ななかぼ(薔薇科)

満天星どうなんつし(躑躅科)

山帰来さんきらい(百合科)

二輪菊ふたりんぎく(菊科)

菊きく(菊科)

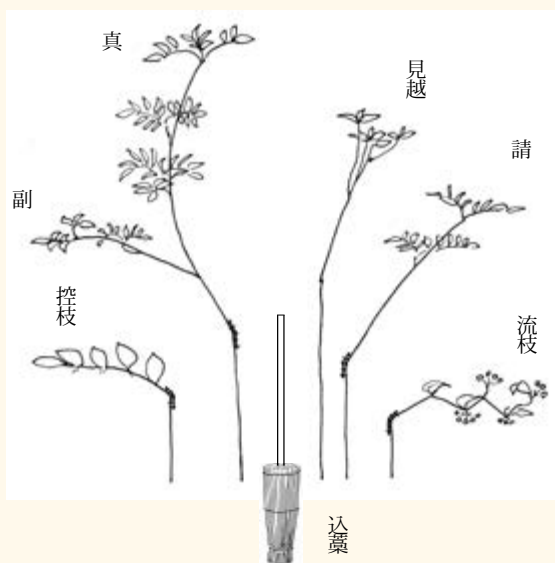
鳴子百合なりこゆり(百合科)

姫百合ひめゆり(百合科)

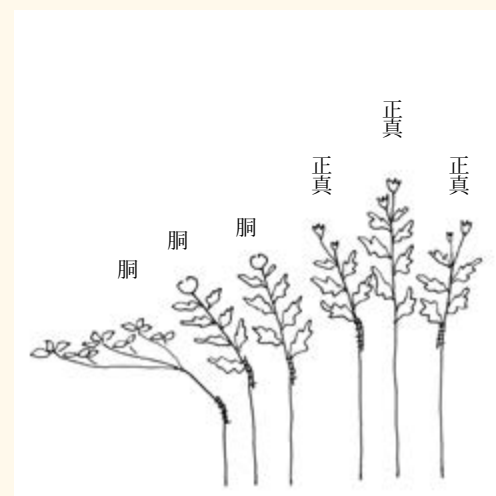
花器

羽島焼花瓶

立花の役枝 正面から見たところ（前後に出ているので実際の長さは絵よりも長い）



横から見たところ





蓮の立花

8月18日、岡山の上野淳泉先生指導による流枝会「蓮の立花研究会」に参加させていただいた。

まずは早朝5時より手分けして2カ所の蓮田で花と葉を切り、水につけて会場へ移動。専用のポンプで水揚げののち、茎に針金を入れながら立てる。午前11時には全員立て終えて、午前中の鑑賞。

蓮は二人一組になって茎の切り口からポンプで水を送り込んでいけるのだが、水が葉脈に入ってゆく様子がはつきりとわかって面白い。できれば水中にあった部分を残していけたほうが水揚げがいいようだ。私の作例でも真の一番背の高い葉が長持ちしていた。

上野先生からは長年の経験で身につけられた蓮の出生について、いろいろと教わる事ができた。いわゆる口伝の部分である。ご自分で見つけられたものもあるとのこと。教わり、身につけ、見つけて、伝える。集い、いけてこそ味わえる体験であった。





貝塚伊吹

仙溪

花型 行の花型

花器 煤竹竹筒

「伊吹」は松科・柏槇属（伊吹属または鼠刺属）の常緑高木で、針状の葉を持つ。

生花の稽古には「貝塚伊吹」がよく使われるが、これは伊吹の変種で葉の先は丸みがあつて手に優しい。貝塚伊吹を伊吹と呼んでしまつていたので、混同しないように注意したい。

花材となる伊吹の仲間には、立柏槇、這柏槇（磯馴）、杜松（鼠刺、ねず）などがあるが、父は杜松を好んで立花によく使つていた。いかにも仙人が住んでいそうな雰囲気の木である。

花展には立柏槇や這柏槇を使うことが多いが、手袋をはめていけないと、痛くていけない。

生花の基本花型の解説にと、貝塚伊吹7本を使つて7体の役枝をつくり、行の花形に付けている。

左頁にそれぞれの役枝の長さや形を図解してみたが、あくまでも誰でも解るようにと長さや出口の基本を示しているので、これを基本にしながら花材それぞれの出生や特徴を生かす微妙なさじ加減は先生から随時教わるようにしてほしい。

真の全長を畳（京畳）の幅で測ることもできる。（およその目安として）



躑躅^{つづじ}

仙溪

躑躅の生花は枝が折れやすいので骨が折れる。水際で枝どうしを添わせるのもひと苦労である。花屋によく縮まった躑躅の太枝があつたので、二本を買い求めて生花をいけた。

花屋では霧島躑躅ではないかとのことだったが、躑躅は花の時期でも判別が難しい。ただ、よく見ると春でもないのに若葉が芽吹いているので、山躑躅の系統だと思われる。山躑躅は春と夏に葉が生え替わる性質があるそう。霧島躑躅も山躑躅の系統である。

日本はツツジの国と呼んでもいいくらい多くの自生種と園芸品種があり、その栽培の歴史も古い。元禄5年(1692年)には江戸染井村の伊藤伊兵衛がツツジとサツキの専門書「錦繡枕」を出版して、そこには170を越える品種が紹介されている(ちなみに国立国会図書館の公開デジタル資料としてインターネットで閲覧できる)。「立花時勢粧」が出版された4年後にそれだけの書物が編まれていることを見ても、江戸時代前期には、かなり園芸が盛んであつたことが想像できる。

しかし躑躅の良いものはそんなに多く出回らない。優れた育種技術をもった産地が増えることを望む。





アブラドウダンの立花

仙溪

この立花の真と請に使った枝は、ここ数年、アブラドウダンの名前で出回るようになったもので、葉の表面に微かな光沢があり、互生する葉は枝先に集まるので輪生しているように見える。細い枝であるが、水揚げがよく、色づいた葉は二週間たった今も元気である。

夏頃の稽古でいけた時には花が咲いていたが、ドウダンツツジの花には似ていない。



バイカツツジの花
参考 (<http://blog.livedoor.jp/tada170302/archives/5701634.html>)

調べてみると、これはバイカツツジであるらしい。バイカツツジがアブラドウダンの名前で流通しているようである。

バイカツツジは躑躅科・躑躅属の落葉低木で（ドウダンツツジは灯台躑躅属）、山地の林縁に生育する。水揚げがよく、葉に油を塗ったような照りがあるので、花材となったのだろう。きつとこれから花材として定着すると思う。

細枝は慎重に扱わないと折れてしまうので注意したい。



数日後に寒菊をはずして、胴の檜扇を留に使い、副の檜扇は花茎を繞めて副流しの動きのある花型にいかけてみた。

少し大きい感じはするが、これから先、葉株で檜扇の実をいける機会が増えてほしいものである。



檜扇 寒菊 仙溪

万葉集に「ぬばたま」の名前で詠まれている檜扇の実は、夏の終わりに緑色の莢がふくらみ、秋には茶色くなって割れると中から漆黒の種子が顔を出す。

今年はめずらしく葉株ごと売られていたので、寒菊をとり合わせて、生花でいけてみた。



除真のきしん 松の立花

仙溪

日本いけばな芸術九州展に松の立花を出品したので、会期終了後持ち帰って数日後に撮影した。一部いけかえているが、松や躑躅は京都と福岡を新幹線で往復したことになる。長旅ご苦労様だったが、福岡でも京都の家でも、多くの人に見てもらえたことが嬉しい。

松は古い葉を掃除すれば、付け枝でも勢いは保たれる。時々霧を吹くことで緑も褪せにくい。特に立花で松を扱う場合は、古い葉の掃除に時間をかける。指先が松ヤニで真っ黒になるが、全体に引き締まった印象になり、枝も生きてくる。

先月号では近松門左衛門の浄瑠璃に立花が扱われているを紹介したが、もっと以前に書かれた能や狂言の中にも立花（あるいは立て花）を題材にしたお話はすでにある。能の「半蔀」や狂言の「真奪」がそれで、「半蔀」には立花供養が、「真奪」には立花の真の松を探しに出かける場面が描かれている。どのような内容かは次号で紹介してみたい。

松の立花を立てていると、流祖の活躍した江戸時代前期や、能・狂言の書かれた室町時代と今とが、ちゃんと繋がっていると感ずる。古典花はもろんのこと、盛花・投入にも古の精神は受け継がれている。そんなことを思いながらいけている。



寒桜

△10頁の花▽

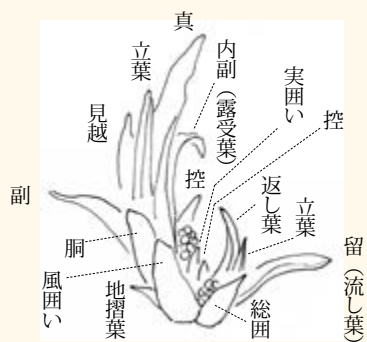
仙溪

花型 草型 副流し

花器 銅花瓶

今年の寒桜は良い枝に恵まれた。比較的ねばりがあり、撓めやすい枝で、枝の縮まりもいい。ある程度の太さもあり、足元がほぼ真つ直ぐだった。ちなみにいけばなで寒桜と呼んでいるのは子福桜ではないかと思う。

寒桜は晩秋から初冬の枯淡な生花の稽古に欠かせない。(薔薇科)



万年青 〆11頁の花〆 仙溪
花型 十五葉二果
花器 陶水盤
正月花の作例。常緑の葉と赤い実が新春を言祝ぐ。産地で葉の大小をバランス良く組み合わせて出荷される。生産者の技量がいはば文化を支えている。(百合科)



山茱萸 椿

仙溪

花型 草型 内副流し

花器 鉄軸広口花瓶

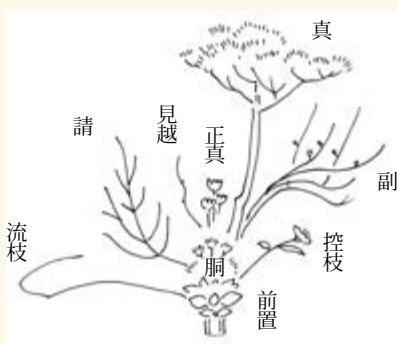
山の茱萸と書いて山茱萸^{さんしゅゆ}。春に黄色の小さな花が密集して咲き、秋に楕円形の赤い実がぶら下がる。見るからに美味しそうだが、お弟子さんが蜜煮にしてくださったことがあり、なかなか美味だった。韓国では庭に植えておき、実は薬にすると聞いたことがある。強精薬、止血、解熱作用があるらしい。

春の花の黄色も鮮やかだが、初冬に葉が落ちたあと、たわなに赤い実がぶらさがっている姿も感動的である。つるりとした赤い実の力強さは、大陸由来のものだ。

山茱萸は中国、朝鮮半島の原産で、日本へは江戸時代中期に薬用としてもたらされた。水木科・水木属の落葉小高木。枝にねばりがあり、撓めがきくので生花の稽古にもよくいける。

花屋で急角度に曲がった枝を見つけたので、内副に用いてみた。どんな作用でこんな曲がり方をするのだろう。猿が折ったのがそのまま固まったものか。





除真^{のきしん}の立花

仙溪

赤松と五葉松を真と請に使った立花。副、見越、流枝に朱木瓜、控枝と前置に椿二種、正真に白菊、胴には五葉松。あしらいに寒菊の開花をのぞかせた。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、こういうのを「行の花形」と呼ぶ。本勝手では真が左に出るので、右に出る場合は「逆勝手」ということになる。

「除真行の花形逆勝手」となる。

この立花は「富春軒初春の会」で立てたもので、蘇東坡の「赤壁の賦」という漢詩の屏風の前に飾った。屏風の幅にあわせて、流枝を長めにだしている。

花器は父が好んで使った森野泰明氏の陶花器「雲藍條文花器」。父の思い出がいっぱい詰まった大切な器だ。



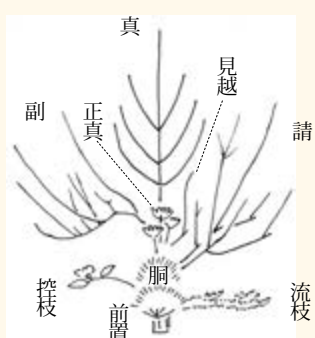
直真の立花

挿花 和田慶千
指導 仙溪

黒松の若木（若松）を真に。請に白梅、副に紅梅、見越に臘梅（臘梅、臘梅）。正真に黄菊、控枝に白玉積、流枝に苔梅。胴に三光松、前置に赤松が使われている。あしらいに数椿。この花形は真が中心に真つ直ぐ立つ「直真」で、こういうのを「真の花形」と呼ぶ。副が左に出ているので本勝手である。

「直真真の花形本勝手」となる。この立花は「暁春軒初春の会」で立てていただいたもので、今後も「初春の会」には立花研修会の先生に、お迎えの花として立てていただくと思う。

花器は小川欣二氏の陶花器「追想花瓶」。先の立花研修発表会で岩田慶寿先生が使われていた。若松を中心に、紅白の梅の対比が見せ場になっている。





水仙一色^{いっしき}の立花

插花 横田慶重
指導 仙溪

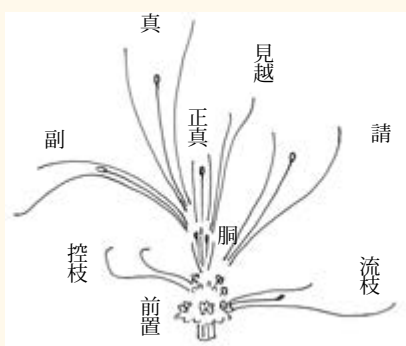
水仙だけで殆どの役枝をいれる立花を「水仙一色」と呼ぶ。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、「行の花形」と呼ぶ。真が左に出るので「本勝手」ということになる。

「水仙一色除真行の花形本勝手」となる。

この立花も「富春軒初春の会」で立てていただいたもの。

花器は幾佐田昌宏氏の陶花器「紫紅彩花瓶」。赤色濃淡の小菊との映りがはんなりとしている。



第35回 京都名流いけばな展 会期 2月11日(火)～16日(日) 会場 JR京都駅新幹線コンコース

桑原仙溪 立花 行の花形 赤松 五葉松 木瓜 椿 水仙 花器 青銅立花瓶





桃

△9頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し
花器 煤竹筒



除真のきしん 白梅の立花

仙溪

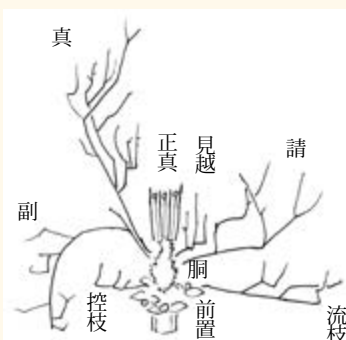
花型 行の花形

花器 耳付青緑釉コンボート

日本いけばな懇話会「梅の花会」に出品した立花。会期中残念ながら花は咲かなかつたが、その後家で咲き、長い間甘い香りを楽しめた。

昔のまわった老梅で幹はこつこつとしている。梅は撓めがきくはずなのだが、最初に撓めた枝は簡単に分離してしまった。あまりのショックに呆然とする。気を取り直して作戦変更。自然の分かれ枝をそのまま使うことにした。元々大きな一本の枝から7つの役枝を作っている。

花会では様々な流派の先生方の梅のいけばなを拜見でき、とても勉強になった。他流に引けを取らない花材を提供してくれた花屋の気概に、なんとか応えなくては。技量不足を感じつつ、老梅に敬意と感謝を。





小手毬 チューリップ

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け
花器 飴色陶水盤

小手毬の枝がつくる曲線には独特の美しさがある。白い手毬が跳ねてくるような動き。前方へ垂らすとまるで白い花の滝だ。

そんな小手毬は生花でいけるとなかなか難しい。あまり撓めがきかないので枝振り次第である。大きめの水盤に赤いチューリップと株分けにした。小手毬の分かれ枝は互いに絡めたりしながらできるだけ生かすようにしている。



生花

ユーカリ 薔薇

仙溪

花型 二種挿し 草型 副流し
花器 陶コンポート

現代的な花材での生花の作例。

ユーカリはオーストラリア原産のフトモ科ユーカリ属の常緑樹。500〜600種類があり、多くが高木になる。

現在世界で最も高い樹木は北アメリカ・カリフォルニアのセコイアで、樹高115m余り。とてつもなく背が高いが、過去にはなんとユーカリが世界一高い木だったそうだ。オーストラリア・ビクトリア州のユーカリの仲間、マウンテンアッシュの132m余り。この木は元々152mあったという非公式の記録もある。まさに天を突く高さだ。ちなみに京都タワーでも131mである。ユーカリをいけながら空高くそびえる木を想像するのも楽しい。根締めには小輪の薔薇を選んだ。





太蘭 芍薬

△2頁の花▽

仙溪

花型 株分け生花

主株 太蘭 (蚊帳吊草科)
子株 撫子 (撫子科)

花器 青磁水盤

太蘭の細い線が揃うことで生まれる造形美は、他のものではつくることができない。太蘭の生花で気を遣うのは、どこから見ても茎の線が交叉しないようにすること。太蘭だけでは地味なので、季節の花と株分けにすることが多い。撫子を子株にいた。

左の写真の子株は「剣山の粧」という芍薬で、葉が小さく締まっています。子株に丁度いい。蕾は小さいが、咲くと大きな玉状になる。

床の間に花菖蒲の軸を掛けて飾った。花の絵の軸を掛けて花をいけることはあまりないが、水ものの太蘭と陸ものの芍薬に、水辺の花菖蒲が加わると趣が増す。





七竈 鉄線

△3頁の花▽

仙溪

花型 二瓶飾り

主瓶 七竈 (薔薇科)

副瓶 鉄線 (金鳳花科)

花器 染付花瓶 (加藤巖作)

三つ足水盤

鉄線の生花には支柱がわりの枝が要る。七竈をいけたあとの残り枝を使った。鉄線は足元をよく解しておく。



葉蘭 七葉 仙溪

花型 草の花型 副流し
花器 白竹竹筒

生花の中でも最も基本的な形式を
そなえている「葉蘭」は、緑の葉を
あつめて形を作り、その造形の美し
さを見るいけばなであり、華麗な花
の美しさよりも、静寂な内面美を見
るいけばなといえる。

単純な葉の組みあわせによって、
均衡のよくとれた流麗な花形を造り
上げ、そこに高雅な品格をもとめよ
うとする。徹底した技術の修練に
よつて素朴な材料の中から美をみつ
け出すこの生花は、誇張していえば、
「禪」のこころをもつものといえる。
(以上、専溪生花百事より抜粋)

以前は大、中、小の葉を組んで売
られていたが、最近では大きな葉し
か売られていない。中葉、小葉は家
の庭から切つていける。





アガパンサス

トルコ桔梗

仙溪

花形 生花 二瓶飾り

主瓶 行型

アガパンサス(彼岸花科)

副瓶 真型

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 主瓶 トルコブルー陶鉢

副瓶 レースガラス小鉢

南アフリカ原産のアガパンサスと、北アメリカ原産のトルコ桔梗の生花二瓶飾り。故郷はまったく違う花なのに、素敵な共演を見せてくれている。生花の二瓶飾りは、花材のとり合せて様々に楽しめる。互いに無い要素を加えることで味わいが増すように考える。

主株(草の花型 副流し)

副



子株(真の花型)

副



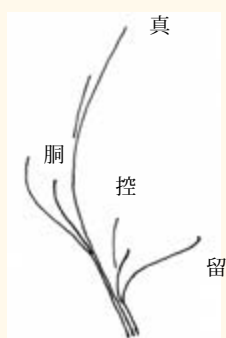
真まき

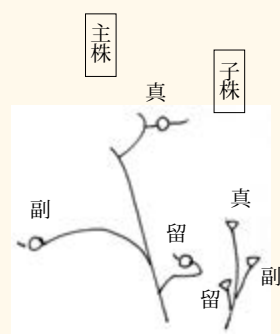
花形 生花 行型

花器 白竹竹筒

花屋で真の名前で売られているのは、大槲科の朝鮮真いぬぐさで、夏の、特にお盆の頃の生花にいけることが多い。基本的な行の花型に似ている。

仙溪





栗 菊
 花型 生花株分け
 主株 栗 (山毛櫨科)
 子株 菊 (菊科)
 花器 焦茶釉水盤
 仙溪
 〈10頁の花〉



夏櫨 なつはぜ
仙翁花 せんのおうげ

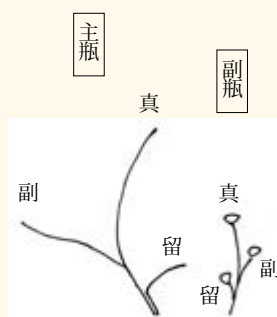
△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花二瓶飾り

主瓶 夏櫨 (躑躅科)

副瓶 仙翁・仙翁花 (撫子科)

花器 陶花瓶 平茶碗



旭葉蘭 七葉

仙溪

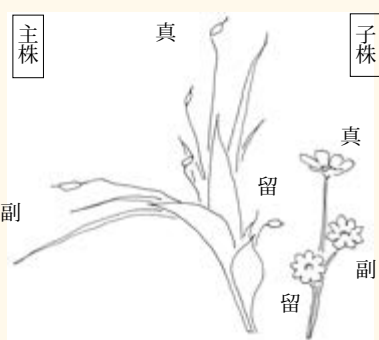
花型 生花 行型
花器 煤竹竹筒

葉蘭は百合科・葉蘭属、中国原産の常緑多年草。根茎を乾燥したものを煎じて服用すると、利尿、強心、去痰、強壯作用がある。春に地表す

れすれに花が咲くが目立たない。葉は根茎から直接出て一枚ずつ立つ。最初は巻いた状態で出てくるが、日に当たると成長が止まるため、巻

きの外側はせまく、内側はひろくなる。葉には右巻きと左巻きがあるの
で、葉脈の右の広い葉と、左の広い

このような葉の性質を見分けて、美しい姿にいけることが大切である。



紫蘭 秋桜

仙溪

花型 生花 株分
花器 耳付陶コンボート

紫蘭は蘭科・紫蘭属の多年草。春に紫色の花が咲く頃は背が低い、晩夏の実の頃には葉も花茎も伸びやかになっている。花茎を抜きとり、葉も一枚ずつにしていける。秋



桜と株分けにすると、紫蘭の個性が際立つ。はじめて合わせてみたが、感じの良い組み合わせである。

レモンちゃん

彼が家に来て2年。いけばなを見る目も肥えてきたようで、あーこわい。どうやら気に入るとそばまで来てくれる。ただ花の水が呑みたいだけという噂もあるが。

写真右から7月20日、檜扇生花のそばでほっこり。9月16日、花梨と菊二種の投入を拝見中。レモン先生、お手柔らかにお願いします。





蔓梅擬の立花

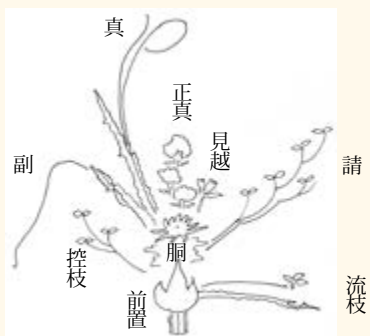
〈4頁の花〉 仙溪

花材 蔓梅擬 油灯台躑躅 鶏頭

糸菊 竜胆 伊吹 苔木

花器 大谷焼花器

今月号は掲載できなかったが、「立花時勢粧」の内容を通して、立花により興味を持たれた方も多いと思う。立花には九つの役枝があり、それぞれが互いに影響しあって一瓶の立花が成り立っている。非常に複雑ないけばなだが、全体の風情というもの大切にしたい。形になればなんでもいいわけではない。





姫柢木 △5頁の花▽ 仙溪

花型 草型 留流し

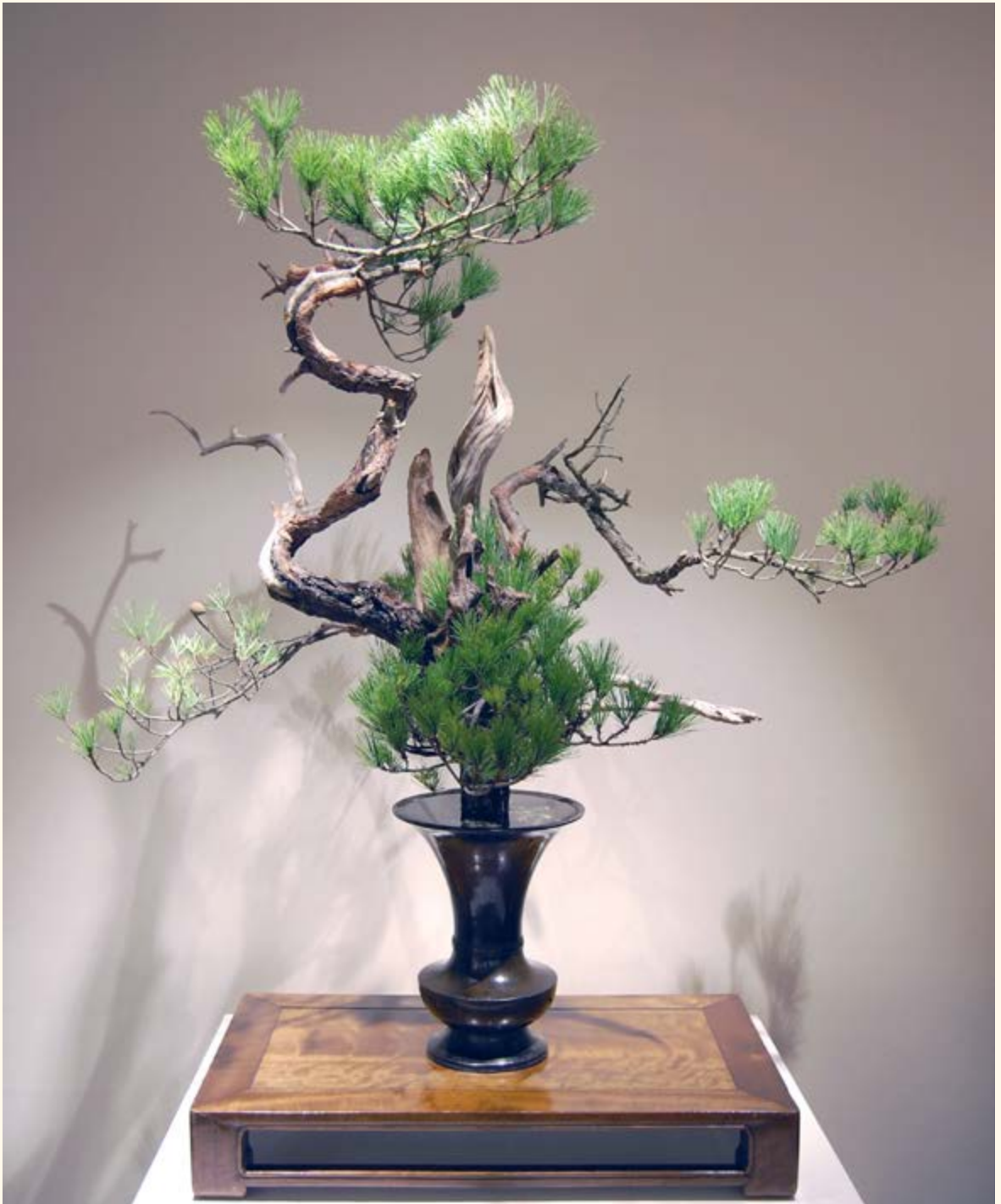
花器 竹筒

柢木は錦木科の常緑低木あるいは小高木で、生垣などに利用される。作例の姫柢木や、大きな葉で斑入りの鼈甲柢木が生花の花材になる。

ちなみに、蔓梅擬も同じ錦木科である。

姫柢木は枝にねばりがあるので、生花の稽古にはもってこいである。草型、留流しにしたが、留の枝の切り口を工夫しないと、枝先が前へ来てしまうので注意のこと。





松一色 △ 9頁の花▽ 仙溪

花型 行の行

花器 銅立花瓶

日本いけばな芸術展の歴史展示に
立てた立花。真の幹は自然の曲がり
である。正真の晒木が効いてくれた。

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」

会期 10月8日(水)～13日(月)

会場 大阪高島屋7階



水仙

花形 行型

花器 陶水盤

天仙、地仙、水仙という言葉がある。

て、草花の中でも最も高貴な感じを

仙溪

もつ花といわれる。初冬十一月より晩冬の二月まで、初季、盛季、晩季の三期にわけて挿法が定まっている。

初季には花二、三本程度で葉組の

中に花を低く入れ、袴も低く見せる。

十二月に入って盛季となり、やや花高く挿して五本程度まで。花を入

れない三枚組みも加えて七本程度まででいける。袴もやや高く見せる。

一月下旬より晩季。多少乱れの心をあらわし、開花を多く入れ、三枚

組みの若葉を少なく入れる。

花器の変化によって、それに適した花形をつくりあげる。

作例は水仙五本の生花で、初季から盛季へ移る中間といった花形。

十二月中旬にいけるなら、もう少し花の位置を高くいける。





第65回 華道京展 後期展

テーマ「煌めいて京の花」

会期 10月16日(木)～21日(火)

会場 大丸ミュージアム〈京都〉

前期展 10月16日(木)～18日(土)

桑原仙溪 立花

松 眉刷毛万年青

後期展 10月19日(日)～21日(火)

桑原仙溪 生花

丸葉の木 糸菊





石化柳 薔薇

仙溪

花形 草型 副流し 二種挿し
花器 陶コンポート (柳原睦夫)
陶芸作家、柳原睦夫さんの作る器
はともにもモダンで、そのため普段は
いける機会を失っているが、ここぞ
という時のためにとつてある。石化
柳に菊や椿の根締めなら自然調の器
を選ぶが、深紅の薔薇を選んだので、
この器にした。

石化柳に赤薔薇はよく映る。帯化
した力強い造形美がモダンに見え
る。上質の薔薇は撓めても長くもつ
てくれた。



水仙一色

仙溪

花形 立花 真の花形
花器 陶花器

立花研修会で立てた直真の水仙一色立花。九つの役枝だけで、やや小振りに立てた。受筒は著我の葉で隠している。

あしらの葉を加えて、もっと厚みのある花形にするなら青銅の立花瓶を選ぶところだが、素朴で身近な立花なので、オランダの陶芸家からいただいた焼き物の器を選んだ。

ザールバークさんとは一九八八年にドイツでお会いして以来のおつきあい。ジョージ・デビッドソンのキクスクールいけばな合宿特別講師として家族みんなで行ったときに、生徒さんのいける器のほとんどは彼がつくったものだった。

父の立花が好きだったデビッドソンさん。彼女のいけばなを支えたザールバークさんも古典花に関心が強く、その水際の美しさもよく理解されている。数年前に奥様と日本に來られた時に、この器をいただいた。毎月テキストを贈呈しているので、喜んでいただけと思う。



赤芽柳 椿

仙溪

花形 行型 二種挿し

花器 銅器

右ページの立花の器とは対照的な銅製の器。十三世の「専溪生花白事」の中では、金茶の二輪菊を草型留流しに付けておられる。中国古代の祭器に見られるような装飾が施されていて環の耳がついている。テキストでもめったに使ったことのない器だが、力強い赤芽柳を受け止めてくれる器を考えたときに、ふとこの器を思い出した。

今号の「立華時勢粧」解説で、「花瓶の事」の中に「貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならばふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかくく立てる。是を花瓶あしらいと云う」とある。貴人の器は大切に扱うべしという戒めと、器と花材の調和（軽重、品格などをそえる）に配慮せよとの教えである。他にも興味深いことが書かれている。

根締めを選んだ椿の色が気に入っている。数椿ほど濃くはなく、西王母ほど薄くない、ちょうど頃合いの色が、赤芽柳の赤色と黒々とした銅器の色のつなぎ役にぴったりだ。

器と花材の選択はとても奥が深い。いろいろと試してみながら、お気に入りの組み合わせを、自分の引き出しにしまっておきたい。



老松の立花

△2頁の花▽ 仙溪

真と諱の老松のバランスが見所。真の松は直真のように直立し、上の方で右に除いてから大きく左へ出た枝だったのをそのまま使った。自分としては直真として立てている。松の緑と木瓜の朱色は相性がいい。金明竹を見越の下にあしらうことで、新年を言祝ぐ気持ちを添えた。

花材 老松（松科）

木瓜（薔薇科）

枝垂柳（柳科）

金明竹（稲科）

菊（菊科）

椿（椿科）

銀芽柳（柳科）

枇杷（薔薇科）

花器 銅花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
2 月号
No.620

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



臘梅の立花ろうばい

△表紙の花▽ 挿花 中道慶清

『暁春軒初春の会』で、もてなしの花として立てた三つの立花を解説する。

この真、請、見越の臘梅は一本の幹から出た分かれ枝をそのまま花形に取り込んである。立派な臘梅で、撓めると折れてしまう。本来の見越は請側の後ろに出るのだが、真側の後ろに出ていた枝を生かして残し、本来の見越の出口に松を覗かせている。臘梅が際立つように、他の役枝は軽くつくられている。

花材 臘梅（臘梅科）

松（松科）

水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

枇杷（薔薇科）

花器 天女模様銅花瓶



雲龍梅の立花うんりゅうばい

△3頁の花▽ 挿花 阪本慶純

雲龍梅はとても香りがいい。玄関の間に松の立花、その右の間の床に臘梅、左の間の床に雲龍梅を飾ったが、それぞれに初春の香りを楽しんで頂けたと思う。床の大きさにあわせて、雲龍梅の立花は小さめに立ててある。「萬歳寿而康」の書の軸を掛けてその前に飾ったが、字を隠さず、よく調和していた。松の立花は金屏風の前、臘梅の立花は金地に波模様舞扇の軸の横に飾った。

真が右に張っているので、流枝でバランスをとっている

花材 雲龍梅（薔薇科）

寿松（松科）

椿（椿科）

アイリス（菖蒲科）

小菊（菊科）

花器 銅立花瓶







生花二作

仙溪

〈2頁の花〉

木瓜 椿

花型 草型 副流し 二種挿し

花器 紫紅彩花瓶 幾左田昌宏

〈3頁の花〉

啓翁桜

花型 草型 副流し

花器 天女模様赤銅花瓶

この二作の生花の花器は、どちらも十三世家元ゆかりのものだ。

昨年しんねんの春に京都青窯会の皆さんと一緒にイベントをさせていただいた時、その懇親の場に幾左田昌宏きさだまさひろさんも来ておられた。京都陶雅会の西岡隆一しおかたけいちさんと共に家元宅に來られたことを、つい昨日のことのようにお話をくださった。

「こんな形のでけへんか」と、十三世がアドバイスをして、同じ形をいくつか作られたそうだ。下蕪しもわのかたち、繊細な口くちのつくり、作り手の高い技量と品格を感じる。「あの頃とにかくどんな形をつくったらええんかわかんから」と云っておられたが、「ええもん作りたい、面白いもん作りたい」という気持ちが人を出会わせるのだと思う。どんな世界でも、この気持がないといいものは生まれないのだ。

そしてこの銅器も十三世がデザインした一点物。口の広がり、立



花や生花の水際を美しく見せてくれる。片側で天女が笛を吹き、反対側では舞い踊る。表面は部分的に赤みがかったているが、これは赤い漆を焼き付けてあるのだ。
これらの器に花をいけさせてもらえることに、感謝している。



啓翁桜一色の立花

仙溪

花型 除真立花 行の花形

「請上り立」

花材 啓翁桜(真 副 見越

請 流枝 控枝)

アイリス(正真)

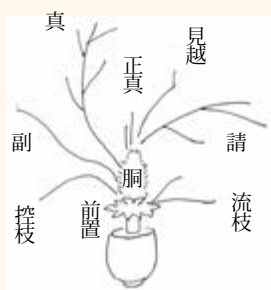
松(胴 椿(前置)

花器 陶花瓶

昨年3月の立花研修会で立てた立花。「行の花型、請上り立」という花形で、請の出口を基本よりも高くしている。竹などの下へなびくような枝を請にするための花形で、桜の枝が川面に枝を伸ばす光景を思い描いて、請の枝先を下へさせている。

写真で見ると、もう少し請の出口に近いところで撓めて、ビュンと下へさげてよかった。それと流枝の出口が高すぎた。太い幹を加えればよかった、などと反省点があれば見えてくる。

本来、桜一色の立花には他の花を混ぜないことと書かれているが、啓翁桜のように華奢な枝の場合は花を添えてもいいだろう。





河津桜の生花

△11頁の花▽ 仙溪

2月中旬から3月中旬にかけて、一足早く春爛漫の桜花を楽しむことができるのが河津桜だ。もともと伊豆半島の河津に咲いていた早咲き種だが、今年は各地で咲いた話を聞いた。染井吉野の先発隊みたいなボジションだろうか。

はじめて生花にいがけたが、枝は折れやすい。切り枝の場合、自然開花よりも花色は薄くなる。



平安神宮献花会大会（京都）
会期 4月14日（火）～16日（木）
会場 平安神宮 額殿
桑原仙溪（写真③）



松真立花
花形 除真行・左流枝
花材 松 真・副・流枝・胴
躑躅 請・前置
菊 正真
晒木 見越・控枝
鳴子百合 あしらい



華道京展

仙溪

笠松真の立花（前期）

真の枝は直立した笠松の下に左右に枝がでていたので、それらを生かして大きな真とし、下半分に残りの役枝を配した。松と石楠花だけで立てた立花。花器は銅立花瓶。





七竈の生花（後期）

大きな蛇の目に大きな又木を使用。自然の曲がりを生かした真に他の枝を添わせている。花器は阪野鳳洋作の陶深鉢で岩のような口辺のつくりは自然美を感じる。



えんどう豆

ベル鉄線

△2頁の花▽ 仙溪

2頁の写真は5月初旬の撮影で、えんどう豆の園芸種だと思うが、宿根スイートピーもこのようにいけられる。

春のスイートピーが一年草で、その花だけが出荷されるのに対して、初夏に蔓のまま出荷される多年草のスイートピーを宿根スイートピー、またはサマースイートピーと呼んでいる。

枯枝を固定しておいて、豆の蔓をからませ、ベル鉄線を根締めに加える。

花型 二種挿し 草型 副流し

花材 宿根スイートピー（豆科）

ベル鉄線（金鳳花科）

花器 盃型ガラス花器



立花研修会の花

△3頁の花▽

仙溪

燈台躑躅 真・請

土佐水木 副

躑躅 見越

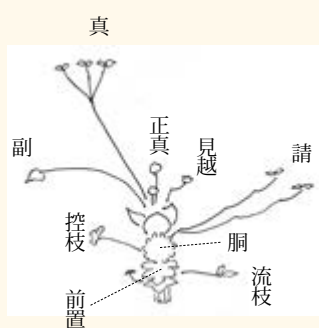
芍薬 正真

紫陽花 控枝・胴

鳴子百合 流枝・前置

擬宝珠 大葉かこい

撫子 あしらひ





七竈生花

仙溪

日本いけばな芸術

中国展出品作

花型 生花 二種挿し

花材 七竈 鉄線

花器 御砂焼花器

私と上野淳泉先生（日本いけばな芸術協会・特別参予）は広島の「御砂焼」に花をいけた。

御砂焼は宮島焼とも神砂焼ともいい、古くから厳島神社参拝の際の縁起物として焼かれてきた。宮島の砂を粘土に混ぜて焼かれる。

私がお借りしたのは直径が30センチもある大きな器で、今回の花展のために特別に作られたもの。事前に器の写真を見て何をいけようか考えた。

花フジさんが用意してくれたのは見事な七竈。写真の水際で直径10センチ近くある。家でおよそのところまでさばき、新幹線でなんとか広島へ。花器におさめるのに手こずったけれど、ピタッと立ってくれた。

御砂焼が気に入ったのか、たっぷりの水が気に入ったのか、七竈は元気に葉をひろげてくれた。逞しく屈曲した幹には、過去にどんなドラマがあったのか。

桑原専慶流からは23名の出品だったが、岡山の先生方の「いい花をいけよう」という意気込みが嬉しかった。いろんな意味で、思い出に残る素晴らしい経験となったことに感謝している。



貝塚伊吹

仙溪

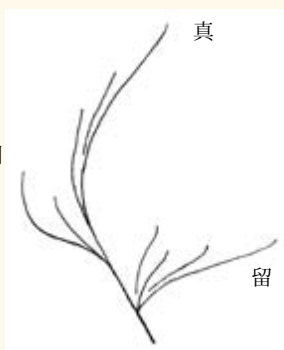
花型 生花 草型 留流し

花器 煤竹竹筒

貝塚伊吹は檜科の常緑樹で、伊吹の変種。伊吹の葉先が針状に尖るのに対して、貝塚伊吹は葉先が丸いので、触っても痛くない。大阪府貝塚市との関係については不明らしいが、貝塚市尊光寺には推定樹齢400年の貝塚伊吹があり、市の天然記念物になっている。

貝塚伊吹は撓めやすいので、生花の基本を身につけるにはもってこいの花材だ。しかし、春の開花時期は避けた方がいい。枝一面に雄花がついている。

作例は留流しの花型で、副と同じくらいの長さに留をつくっている。副の枝先を上げて、長く伸ばした留を際立たせる。





雪柳 二輪菊

仙溪

花型 生花 株分け

主株 草型 副流し

子株 真型

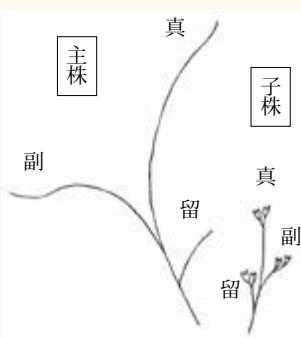
花器 飴色釉水盤

株分けの生花のくだけた雰囲気が好きだ。二種類の花材の組み合わせを考えるのも楽しいし、なにより広い水面が気持ちいい。剣山でいけたあと、小石で隠して水をはると、水際の美しさが際立ってくる。

季節の枝と草花のとり合わせが一般的だが、背の高い草花と低い草花、観葉植物だけの組み合わせ、同じ花の色違いなど、自分で考えて工夫する面白さがある。

花型はどちらか片方に動きをつくるようにして、もう片方でその動きを受け止める。静と動の対比が見所となる。

たとえば教わっていない組み合わせでもいい。オリジナルの株分け生花をいけてみてほしい。いい感じにいられたら写真に撮っておこう。見せて頂けるのを楽しみにしています。





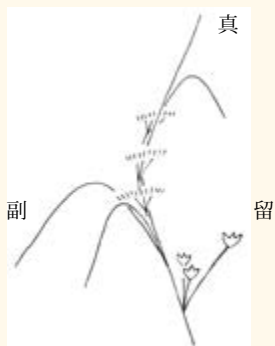
縞薄 女郎花 桔梗

仙溪

花型 生花 三種挿し

花器 小判型陶水盤(伊藤曲哲作)
涼を感じる生花の作例。縞薄は薄
の中では比較的ながもちする。水
盤に足元をそろえて立てるだけで、
清々しい空間が生まれる。

薄の葉は左右に広がるので、前後
に葉がくるように茎を大きく撓めて
真とし、副や胴には片側だけの葉に
したものを挿している。ただ、実際
にはなかなか難しい。納得のいく姿
になるように、葉さばきの加減をそ
の都度工夫する。葉を整理しすぎると
ギスギスするし、残しすぎると生
花にならない。ちなみに作例では3
本の縞薄を使っている。





七竈^{ななかまど}の立花

△4頁の花▽ 仙溪

花型 立花 除眞(行形)

七竈(真・副・見越・請・

流枝・胴)

百合(正心)

木苺(胴・前置)

晒木(控枝)

桔梗二色(あしらい)

花器 天女模様銅花器

山では青々と茂る木の一部が紅葉していることがある。そんな情景を思い描いて立てた。百合の臙脂色が全体を引き締めている。



刈萱 紫鴨上戸

〈5頁の花〉

仙溪

花型 生花 株分け

主株 行型 刈萱 (稲科)

子株 草型 紫鴨上戸 (茄子科)

花器 脚付角水盤 (伊藤典哲作)

珍しく鴨上戸の花と実が切り花で

売られていた。丈夫な茎だったので、

そのまま剣山にさしている。鴨上戸

は白花だが、これは薄紫色をしていた。

また実は青い。以前山道で見つ

けたことがあるが、山の冷たい空気

の中で赤く色づいた丸い実は、寶石

のように美しかった。

黄色くなりかけた刈萱は、ざつと

りと生花のバランスにおさめ、子株

の長く下がった副に対して、主株の

真には厚みをつけている。



菊 萩

〈2頁の花〉

仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 菊 (菊科)

子株 萩 (豆科)

花器 粉引陶花器 (伊藤典哲作)

家庭画報10月号に、櫻子が二色の豆を使った豆ご飯を紹介しているが、それには「萩ご飯」の名前がつけられている。緑と赤の豆色を、萩の葉と花になぞらえての命名だが、心躍る楽しい名付け方だと思う。

萩は古来より日本人に愛されてきた。万葉集に一番多く詠まれているし、美術・工芸にも好んで描かれている。

菊の生花は撓める技術が難しく、敬遠される人が多いが、一株にこだわらないで、あつさりとした株分けにして、とり合わせる花との季節の色彩を楽しむ気持ちでいけてみてはどうだろう。

作例では同色異種の花で上品にまとめたが、萩に対して菊がやや重く見える。小菊や嵯峨菊のほうがバランスが良かったかもしれない。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
11 月号
No.629

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



赤芽柳

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花器 耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ（振袖柳）とも呼ばれ、花芽が大きくなつて、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。

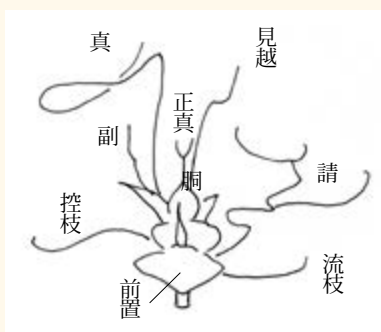
日の当たる側、いわゆる日表は、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。

本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。





◆斜め前から見た奥行き。



松の立花

仙溪

花材 松 あらぎ 木瓜 糸菊

晒木 小菊「赤頭巾」

花器 銅立花瓶



生花

葉蘭九葉

仙溪

花型 行型

花器 煤竹竹筒

九月の家元研究会では、葉蘭九葉の生花を稽古した。テキスト613号、616号にも葉蘭の解説があるのを見返してほしい。出生や独特の深みについて書いている。

葉蘭の生花は数多く活けられることが大切で、巧みな葉つかいの技巧を自ら体得して、自らがその技法を開拓してゆくような研究態度がないと、美しい花形は作れるものではない。これは方法を知ることではなくて、自らが切りひらくような技術の生花である。理解すれば意外に簡単なものだが、それを理解しようとすると熱意と努力が最も必要な生花である、ということを知らねばならぬ。

〔専溪生花百事〕より抜粋

真(序)

留(急)

副(破)



◆横から見たところ。





立花

丸葉の木 (紅満作) 仙溪

花型 行の真

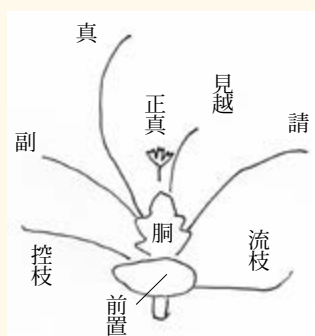
花材 丸葉の木 檜扇の実

杜鵑 数山 査子 竜胆

糸菊 嵯峨菊 (園芸種)

花器 陶花瓶

丸葉の木の紅葉を真、請、控枝に使っている。稽古で立てた初歩的な立て方だが、秋らしい色彩の立花だと思ふ。



◆横から見た、立花の奥行き。





寒桜

仙溪

花型 生花 留流し

花器 耳付銅花器

ネパールの首都カトマンズでは、ヒマラヤザクラが秋に咲く。桜のルーツはヒマラヤ付近と考えられ、もともとは秋咲きであったのが、日本にやって来た頃には冬の厳しい寒さに対応するため、秋に咲くのをやめて冬の間は休眠し、春に花を咲かせるようになったのだ。

日本で秋から冬に咲く桜には、故郷の記憶が遺伝子に残っているということかもしれない。

花屋には、十月桜、冬桜、子福桜^{こふくざくら}などが寒桜の名前で出回る。写真の桜は八重咲きなので子福桜だと思う。近頃は寒桜をいけながら遙^{はる}かネパールに思いを馳せている。



横から見たところ



若松 千両

△2頁の花▽ 仙溪

昨年の「富春軒初春の会」に花手前でいけた生花である。お正月花の生け直しの参考にしていただいてはどうだろう。若松の生花は7本の枝でいけるが、留と控の2本をはずし、代わりに千両を入れている。千両は黄実でもいい。丁度いい長さの横枝を利用するのが意外と難しい。松とのバランスを考えて、総囲、留の沈みにも入れている。

花型 真型 二種挿し

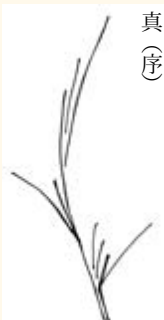
花材 若松 (松科)

千両 (千両科)

花器 青竹竹筒 (9寸)

留 (急)

真 (序)



副 (破)



五葉松の立花

△4頁の花▽

仙溪

冬から早春へ向かう季節の立花。行の花形で、基本通りの役枝の配置に立てているが、真の重心が中心からはずれているので、流枝を大きくして真とバランスをとっている。細枝にまで苔のついた梅は、なんともいえない味がある。この立花の格を上げてくれている。

花材 五葉松（松科）

松（松科）

梅擬（繭の木科）

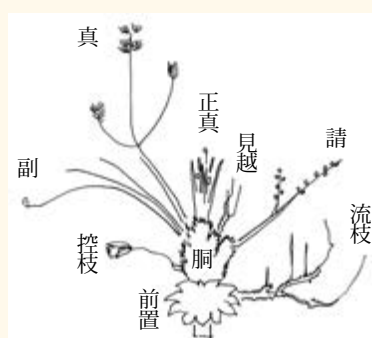
赤芽柳（柳科）

紅梅（薔薇科）

白椿・数椿（椿科）

水仙（彼岸花科）ほか

花器 陶花瓶（市川博一作）



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
2 月号
No.632

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



山茱萸

△表紙の花▽

仙溪

花材 山茱萸（水木科）

花型 生花 草型 留流し

花器 煤竹竹筒

山茱萸は中国、朝鮮半島原産の落葉小高木。早春、枝の先に小さな黄色の小花が集まって咲き、秋にはやや細長い赤い実が枝にぶらさがる。山茱萸の稽古をすると、「庭のサンシュの木、鳴る鈴かけて」と歌われる民謡、稗搦節を懐かしく思いつく。出される方がときどきおられる。今はインターネットで簡単に視聴する

ことができるので探してみると、この歌のサンシュの木は山茱萸ではなくて山椒の木だった。

山椒の木に鈴をかけ、その鈴が鳴ったら家から出ておいで、と歌う。日向地方の方言では山椒のことをサンシュと呼ぶのだ。

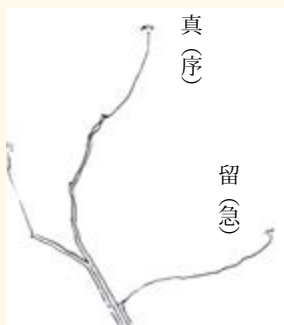
九州宮崎県椎葉村には、その昔源平の合戦で敗れた平家の落人が住みついた。それを知った頼朝の命を受けて、落人討伐のためにやって来た那須大八郎は、平家の鶴富姫と恋に落ちる。姫の屋敷の山椒の木にかけた鈴が、二人の密会の合図になった。そんな恋話の歌を歌いながら、稗を搦いた。まさに、その土地の歴史と文化を感じる生活のひとつ

だ。

さて、山茱萸。日本に来たのは江戸時代中期に薬用として種子が持ち込まれた。実が茱萸（茱萸科）に似るのでこの名がある。山茱萸の実は食べられる。強壮薬として煎じて飲んだり、果実酒にしたり。熟した実を熱湯につけ、種子を取り除いて日干しにしたものが生薬となる。

いけばなでは春の花材として重用される山茱萸だが、木に粘りがあるので少々きつく撓めても折れてしまわない。節を避けて、太い幹は切り撓め、細い枝は捻り撓めて形をつける。

蕾でいけたあと、部屋で花が咲いてゆくのはいいものだ。花の色が春を感じさせてくれる。



副(破)



木蓮

仙溪

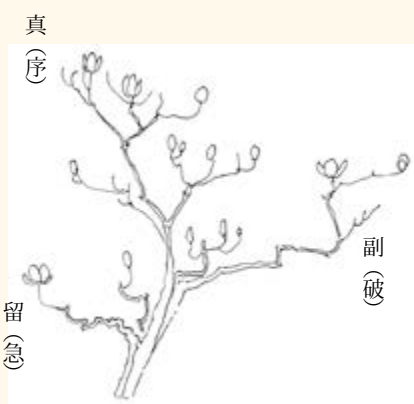
花材 木蓮（木蓮科）
花型 生花 草型 副流し
花器 銅砂鉢

昨年3月の京都東山花灯路いけばなプロムナードにいった木蓮の生花。

いけた時は蕾の先に紫の花色が見え始めた頃で、暖かそうな産毛の生えた芽鱗をいくつか剥がして見せていたが、会期を終えて自宅に飾ってから数日後にはほとんどの花が産毛を脱いで春爛漫となってくれた。

早春の白木蓮は高木になるが、少し遅れて咲く木蓮（紫木蓮）は低木。どちらも中国原産の花木で、単にモクレンと呼ぶのは紫木蓮とも呼ばれる紫色の方だ。

モクレン属の祖先は約1億年前に誕生したことが化石から分かっている。地球上で最古の花木と考えられ、花木類の祖先にあたるそうだ。人類誕生以前から咲き続けている花。木蓮の開花は、地球の春の産声なのかもしれない。



留（急）



臘梅の立花 「富春軒初春の会」 仙溪

花型 除真立 行の花形
花材 臘梅（臘梅科）

松・五葉松（松科）

水仙（彼岸花科）

万年青「残雪」（百合科）

椿（椿科）

枇杷（薔薇科）

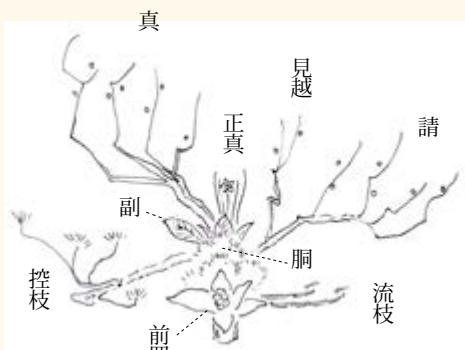
花器 銅立花瓶

立派な臘梅だった。真に2本、請に1本。元の姿のまま花器に立ててこの姿になった。臘梅とも書くが、私は臘月（十二月）の臘を使っている。

「残雪」という斑入りの万年青で前置をつくった。「万年青の前置」は立華時勢粧にも出てくるが、いつか納得のいくいけ方ができるようにしたい。

大きな枇杷の葉を副にしたが、図で控枝と書いた松を副と見なしてもいい。

ロームシアター、富春軒初春の会、イケバナインターナショナル・デモンストレーションと、3カ所でご覧頂けたことに感謝している。





白梅の立花

『富春軒初春の会』

挿花 川瀬慶裕

花型 除真行の花形

花材 白梅（薔薇科）

這柏槇（檜科）

菊（菊科）

白玉椿（椿科）

小菊（菊科）

花器 陶コンボート

（宇野仁松作）

指導 仙溪

白梅と這柏槇で調子を整えた、横張の立花である。

花器に色があるので、敢えて色数を抑え、白梅の品格を引き出した。





松と山茱萸の立花

「富春軒初春の会」

挿花 米山慶嘉

花型 除真立 行の花形

花材 松(松科)

山茱萸(木犀科)

椿(椿科)

菊(菊科)

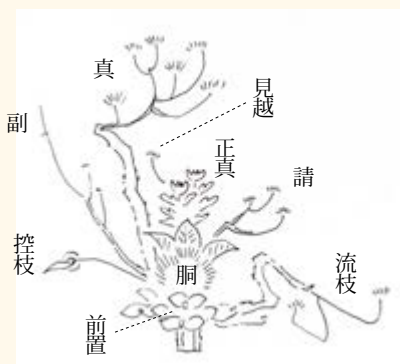
小菊(菊科)

枇杷(蔷薇科)

花器 陶花瓶

指導 仙溪

真の松の出口を低くして、請の山茱萸の出口を高くした。真の梢が中心より右へ出る時は、左流枝といって流枝を左に出すこともあるが、真の松の幹が太いので、流枝は右へ出してバランスをとっている。
流枝の屈曲した枝と副の伸びやかな枝の対比が見所になっている。





桜一色立花 (写真②) 仙溪

いけばなインターナショナル京都の例会で実演
烏丸ビルエントランスロビーに展示(上の写真)

先月号で紹介した藁駝^{たぐだ}さんの言葉。

「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導く。」

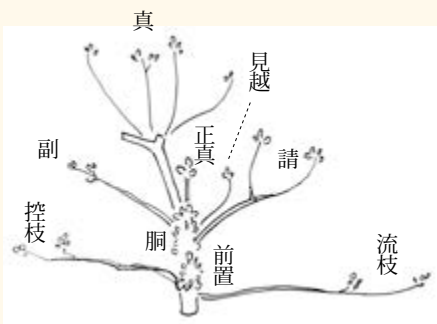
という境地に近づきたくて、河津桜の大きな枝を手に入れて、桜一色立花を立ててみた。ただし枝はほとんど撓^{たが}めずに、針金を一切使わずに、全ての枝をただ込藁^{こむら}に挿すだけ。枝の足を細く長く尖らせると、針金で括^{くく}らなくても、自然に真っ直ぐ立ってくれた。

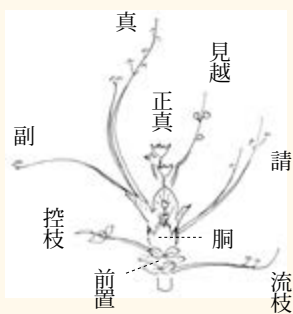
このような立て方は、デモンストレーションで立花を立てるところを見てもらう場合にも向いている。立花を鑑賞する時に針金が見えたのでは興ざめするが、実演においても、技術の解説のためならいいが、美しく立ててゆくなら、ただシンプルに込藁に挿してゆきだけで完成するのが理想的だと思う。

さて、出来映えとしては反省点も多いけれど、立て終えた時の花との一体感新鮮な体験であった。

この桜の立花はビルのエントランスに飾らせて頂き、その後満開に咲いてくれた。いけた花が美しく咲いてくれることが、一番の喜びである。

花型 除真
花材 河津桜
(薔薇科)
花器 銅立花瓶





請の枝にもう少し変化をつけて、
枝先も低くすべきたつと考えてい
る。

山茱萸の立花 仙溪
立花研修会の花
花型 除真
花材 山茱萸 木瓜 椿 菊
墨芽柳 小菊 枇杷
花器 陶花瓶 (矢野款一作)



ビルのエントランスに飾った桜一
色立花を横から見たところ。



桑原仙溪
桑原仙溪

椿の生花

仙溪

京都名流いけばな展出品作

花型 草型 副流し

花材 数椿(椿科)

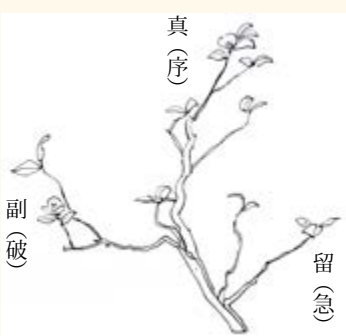
花器 銅薄端

背丈くらいある数椿の大きな一本の枝。枝の曲がりや位置を目で追ってゆく。どこで切って、どこで撓めればいいか。いけ上がりの大きさはどうか。個性的な枝を生かすことができるか。

椿で思い出すのは丹後の千年椿とドイツ・ピルニッツ城の椿。どちらも自由奔放に枝を伸ばしているのがいい。千年椿から感じるのは自然の凄み。一方のピルニッツの椿は樹齢250年だが、冬の寒さで枯れないように、巨大な可動式温室で大切に守り育てられてきた。どうか次の年も花が咲いてほしいと願う人の思いの凄みを感じる。

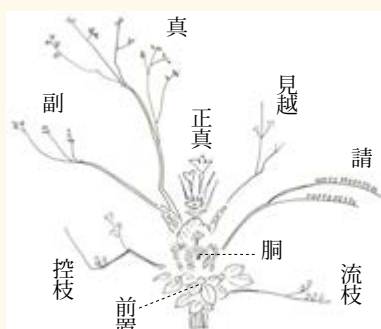
自然と人の思い。この二つからい

けばなは生まれる。





横から見た奥行き



花器 陶花瓶 (伊藤典哲作)

小菊・スプレー菊 (菊科)

枇杷 (枇杷科)

アイリス (菖蒲科)

椿 (椿科)

松 (松科)

黒芽柳 (柳科)

山菜蓂 (水木科)

花材 乙女桜 (薔薇科)

花型 除心 行の行

立花研修会の花

乙女桜の立花

仙溪



二種挿しの生花 仙溪

花型 行型 二種挿し

花材 黄金小手毬おうごんこてまり (薔薇科)

チューリップ (百合科)

花器 白釉花瓶

黄緑色の小さな若葉が可愛らしい。昔から京都の花屋ではサンザシの名前で売られていたが、黄金小手毬、または金葉小手毬という名前の植物で、アメリカ手毬てまりも下野の仲間だそう。春の芽出し花材の一つである。

比較的挽めが効くので生花にもいけられるが、一種でいけるには少し寂しい。チューリップなど春の花をとり合わせて、一株で二種挿しにしたり、株分けや二瓶飾りなどにするといい。

留側のチューリップには、花が小さいもの、葉が丈夫なものを選んでみる。チューリップはぐんぐん伸びるので、時々切り縮めていけなおすようにしたい。

真 (序)

留 (急)



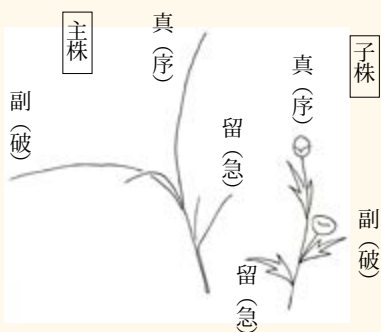


ドイツ菖蒲の生花 仙溪

花型 行型 三花五葉
花材 ドイツ菖蒲 (菖蒲科)
花器 祥瑞広口水盤

ドイツアヤメはジャーマンアイリスとも呼ばれ、ヨーロッパ、アメリカで多くの品種がつけられている。花色によって香りが違い、日本でも多くの花色を育てる人が増えてきた。イチハツの名前で出回るニオイirisと葉がよく似ている。まだまだ出荷量は少ないが、今後いける機会が増えてほしい花材である。





山吹 やまぶき
芍薬 しゃくやく

仙溪

花型 生花 株分け
花材 主株 山吹(薔薇科)
子株 芍薬(牡丹科)
花器 黒釉陶水盤

山吹は薔薇科・山吹属。切り枝では草花のような印象だが落葉低木である。黄色い花をつけた枝が優しく広がる。万葉集にも詠まれ、山吹色という色の名前にもなっているように、古くから親しまれてきた花だ。
株分けにとり合わせた芍薬は一重咲きの「さつき」という国産品種。外国産の大輪種よりも和の雰囲気を感じる品種が山吹には似合っている。

平安神宮献花会大会（京都）
会期 4月14日（木）～16日（土）
会場 平安神宮 額殿
桑原仙溪（写真②）



平安神宮献花会大会 桑原仙溪 花材／木瓜（白花） 春蘭 花器／掛分釉花瓶・清水保孝作



虫狩^{むしかり} オクロレウカ

仙溪

花型 生花 二瓶飾り

花材 主瓶 虫狩^{むしかり} (忍冬科)^{すいかすろ}

別名: 大亀の木^{おおかめのみ}

副瓶 オクロレウカ (菖蒲科)^{あやめ}

ムシカリと杜若、にしたかったが、オクロレウカを小振りにいけて添えてみた。二瓶を選ぶのが意外と楽しい。



素溪(健一郎)が華道京展に出品した躑躅は、その後家で元気に花を咲かせている。レモンちゃんは、その花器の水を飲むのがなぜか好き。



裏白の木

△2頁の花▽

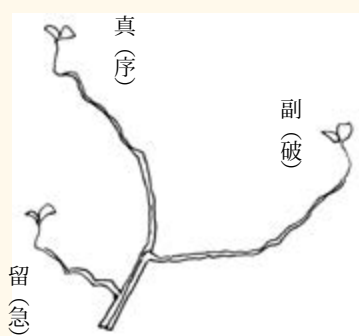
仙溪

花型 生花 草の花型 副流し

花材 裏白の木 (薔薇科)

花器 三つ足青磁水盤

裏白の木は山梨、銀葉などと呼ばれることがある。初夏の葉がひろがつてしまう前と、秋の赤い実が花材となる。太い枝は折れやすいので注意する。





夏^{なつ}櫨^{はぜ} 姫百合 仙溪

花型 生花 二瓶飾り

主瓶

花材 夏櫨^{なつはぜ} (躑^{つじ}躑^{つじ}科)

花器 白竹竹筒

副瓶

花材 姫百合 (百合科)

花器 青白磁水盤

夏櫨^{なつはぜ}の名前の由来は、夏の内から櫨^{はぜ}のように葉が色づくところから来ている。

さて、この櫨^{はぜ}とはどんな木だろう。ハゼノキは漆科の落葉樹で、その果実が木蠟^{もくろう}の原料にされる。安土桃山時代末の1591年に中国南部から種子が輸入されたのが最初で、江戸時代の蠟燭^{ろうそく}の普及に一躍買つてきた。九州の島原藩ではハゼノキ栽培に力を入れて木蠟が特産品となり、現在も製造されている。

ハゼノキが日本に入る前から、日本に自生する漆科の多くをハゼと呼んでいたようだ。蠟^{ろう}を採ったり、樹皮が染料にされたり、弓の材料となったり、もちろん漆を採ったり。そして秋にはほとんどが見事に紅葉する。万葉集にも一首、梶弓^{はじゆみ}の名前で詠まれている。

夏櫨^{なつはぜ}のことを書くつもりが脇道へそれてしまったけれど、花の名前を調べる内にいろんなところへ辿り着くのも、いけばなの楽しみの一つである。是非皆さんも。

師範会研修会

「立花講座」

会期 6月12日(日)

会場 京都プライトンホテル

講師 桑原仙溪

季節の花材で立花を一から立てるところを見てもらい、「役枝の名称」「藁駝なださんの教え」「立花十徳」

について解説した。

除心立花

花材

夏礪 笹百合 珍至梅 躑躅

姫百合 岡虎の尾 紫先代萩

穂咲下野 釣鐘鉄線 羊歯

花器 青瓷花瓶（木村展之作）



この立花は「いけばなプレゼンテーション」に出品したものを元に一部花をかえて立てたもので、丁度、笹百合のときだったので、山で笹百合に出逢った時の感動をもとに、山の草木を集めて立てている。水色の器に白、薄桃色、桃色、紫色、黄色の花が優しく乗った。

同志社大学通信

One purpose 187

～同志社人訪問～

桑原仙溪さんに聞く

現役大学生のインタビューに答えて、私のいけばな観を記事にしていた。

「花と無心に向かい合うことの素晴らしさを、一人でも多くの人に伝え、日本が培ってきた自然を慈しむ心をよみがえらせ高めていく。それがいけばなの家元の務めだ。」

※この冊子をご希望の方は家元事務局にお尋ねください。





沢蓋木の立花

仙溪

日本いけばな芸術展出品（5月）

花型 除真立花 下段除

花材 沢蓋木（灰の木科）

躑躅（躑躅科）

杜若（菖蒲科）

武蔵鑑（里芋科）

花器 龍耳銅花瓶

沢蓋木は名前のごとく溪流を覆うように枝を伸ばす木だ。初夏に白い花を咲かせる。花フジさんの山の畑にも小川の土手に植えられていて、晩夏に訪れた時には瑠璃色の実が沢山ついていた。

日本、朝鮮半島、中国に分布する落葉低木で、灰の木科、灰の木属の植物。灰の木の前は、木を燃やした灰が染料の媒染剤とされたことから来ている。木にアルミニウムが多く含まれていることが、染料の色の発色や定着に役立つそうだ。現在のみようばんに代わるものだった。昔はこういう灰を専門に作る人がいて、植物のことをよく知っていた。現在でも陶芸家の中には様々な木の灰で釉薬を研究されている人もおられる。植物は灰になっても人の役に立っているのだ。ただし環境が汚染されたところで育った樹木は、灰の利用もできなくなるが。

さて、苔むした沢蓋木の枯木を、その曲がりや枝付きを生かしながら立てたのだが、真の出口が低い花型になった。山中の沢に杜若が咲き、躑躅が彩りを添えている。テンナンショウの仲間の武蔵鑑をのぞかせると、深山の景色ができあがった。



株分け生花

仙溪

花型 株分け

花材

主株 グラジオオラス (菖蒲科)
子株 ヒペリカム (弟切草科)
花器 足付小判型陶水盤
(伊藤典哲作)

夏の生花には7月の檜扇、8月の朝鮮槇のほかにも、水辺を連想する植物として、太蘭や蒲、姫蒲などもよくいけている。それらに加えて比較的暑さに強い洋花もいけることがある。作例のグラジオオラスもその一つだ。

グラジオオラスの生花は意外に難しい。作例では葉を外して組み直しているが、葉を外さない方がいい時もあり、その判断には経験から得た勘が必要になる。

ヒペリカムの名前で売られる艶やかな赤い実は、和名を小坊主弟切という。白いグラジオオラスに赤い実がよく合っている。



主株

副

子株

真

留

留

副



夏の立花

仙溪

花型 除真立て

花材

夏櫨 梅花躑躅 檜扇 桔梗

笹百合 下野(紅白) 羊歯

花器 粉青瓷壺(木村展之作)

この真の夏櫨は7月号8頁の立花と同じ枝だ。約一ヶ月持ったことになる。かなりの太枝だったこと、足元を長く削って込藁に挿したので、よく水を吸い上げたのかもしれない。檜扇が季節を感じさせてくれる。



横から見た奥行き





七竈の立花
ななかまど

仙溪

花材 七竈(薔薇科)

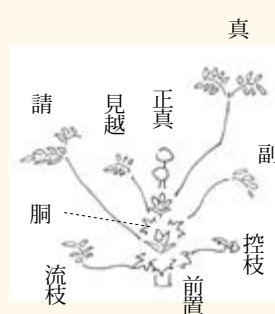
木苺(薔薇科)

鶏頭(鳶科)

竜胆(竜胆科)

三島紫胡(芹科)

花器 陶花器(藤正文作)





アレカ椰子の生花

仙溪

花材 アレカ椰子(椰子科)

モンスセラ(里芋科)

アンズリウム(里芋科)

花器 八角陶鉢





秋草の立花

仙溪

日本いけばな懇話会

「秋草をいける」 出品作

9月17日～18日 建仁寺西来院

花材 ススキ チョウジソウ

ワレモコウ クサボタン

フジアザミ タムラソウ

サワギキョウ サギソウ

シモバシラ リンドウ

シロバナホトトギス

コギク

秋草だけで立てる立花ははじめて
なので、良い経験になった。丁字草
や草牡丹、霜柱などはいけるのものは
じめてだった。丁字草の長細い葉は
オレンジ色に色ついて美しい。草牡
丹は関東ではよくいけられる花だそ
うだ。

いけこみ後、ゲストを交えた座談
会をしたが、いけばなへの様々な思
いが聞けて大変有意義だった。皆そ
れぞれに熱い思いを持っている。



野茨と竜胆の二瓶飾り

仙溪

主瓶 野茨(薔薇科)

花器…紺釉壺

副瓶 竜胆(竜胆科)

花器…朱塗り碗

8月の末に撮影したので、ノイバラの実がまだ緑色だが、一週間後にはオレンジ色の実になった枝が売られていた。

ノイバラは自然では棘だらけなので、痛くていけられない。今は棘の殆ど無いものが手に入るお蔭で、この軽やかな実の美しさをいけて楽しむことができる。有難いことだと思う。

作例のノイバラは大きめの枝を2本買っていているが、できれば3本はあったほうがいいだろう。

実が赤くない分、副瓶に朱塗りの碗を選んで色のバランスをとっている。主瓶には動きをつくり、副瓶は静かな佇まいに。





水仙一色立花

〈10頁の花〉

仙溪

花形 水仙一色立花 真の行
花材 水仙（彼岸花科）
小菊（菊科）

花器 陶立花瓶

水仙の季節がやってきた。まずは
真の花形で水仙一色立花を立ててみ
た。

葉に針金を入れ、自然な葉の動き
を想像しながら形をつける。カクカ
クして、針金が入っていると分かっ
てしまうようではいけない。といっ
て形をつけず真っ直ぐなままではか
えって不自然だ。怖がらずに曲げて
みるのも大切である。



藪山査子
やぶさんざし

△11頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し

花材 藪山査子(雪の下科)

花器 煤竹竹筒

今年の10月は藪山査子の稽古が続いた。この写真は最初にいたもので、別れ枝を副に選んで、伸びやかな枝の動きを生かしている。この後5作いけたが、どれも違う感じに仕上がった。その都度枝の個性も変わるのだから、納得のいく姿にいけるのはなかなか難しい。散らずに残った葉がアクセント。



立花時勢粧の水仙一色立花 仙溪

花型 水仙一色立花 行の草
花材 水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 銅立花瓶

撮影 水沢圭介

京都新聞に一年間連載される「華の時代 二条城にいける」のために立てた水仙の立花。背景は二条城二の丸御殿「遠侍」勅使の間に隣接する帳台構。(11月11日金夕刊掲載) ぼんやり見える障壁画は菊である。狩野甚之丞(永徳の甥)の作とされている。

今回の撮影にあたり、「立花時勢粧 下」にある「水仙一色」3図のうちの一つを模してみることにした。絵の中の葉が立体としてどこへ出ているのか想像しながらだったが、まさに「自由」を得た人の表現だなと感じた。
教わった花型にいけることはいつかできる。その先の「自由自在」な花を目指そう。



立花時勢粧より



赤芽柳

仙溪

花型 生花 草型 留流し

花材 赤芽柳（柳科）

花器 煤竹竹筒

赤芽柳15本の生花。赤芽柳は目の当たる側と裏側とでは枝の色が違
う。いけ終えた時に鮎色の木肌がす
べてこちらをむいてくると、全体
が一体になって美しい。
作例は枝の捌きに乱れが残るが、
多少目をつむって花型の参考に掲載
しておく。

横から見た奥行き





東寺・灌頂院
夜叉神立像 献花
這柏槇の生花

仙溪

花型 生花 草型 副流し

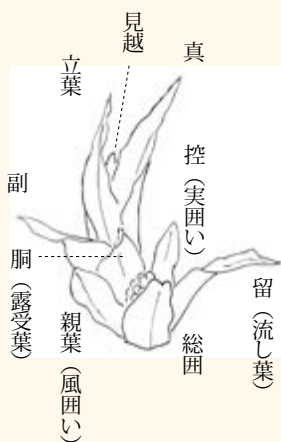
花材 這柏槇（檜科）

花器 銅 薄端

弘法大師空海が彫ったと伝わる夜叉神立像（阿形と呼形）の特別公開にあわせて、京都いけばな協会から10名が献花のいけばな展をさせていただきました。私は両像の間に居られた不動明王立像（平安時代）の横に、ハイバクシンを銅器にかけた。

私ははじめて夜叉神像を拝んだが、普段はそれぞれ専用のお堂に居られるので、格子の間から拝まれる方も多いと聞く。歯痛を治して下さるとも。

夜叉神様の全身は蜂の巣穴が開いて痛々しい。それでもなお見る者に不思議な力を与えて下さる。照明に浮かぶお顔は、想像していたよりずっと優しい印象。周囲のいけばなを喜んで下さっているようだった。



万年青の生花

△2頁の花▽ 仙溪

花型 九葉一果
花材 万年青「残雪」(百合科)
花器 黒色釉水盤

はじめてつけた品種で「残雪」という名前がついていた。大型の万年青で葉に白い斑が霜降り状に入っている。大変珍しい品種のようだ。昨年の新年に立花の前置にかけた後生花にいけなおして2ヶ月間飾っていた。なんともいえない風格を感じる。



黒芽柳 チューリップ

仙溪

花型 二瓶飾り

花材・花器

主瓶

黒芽柳（柳科）

煤竹竹筒

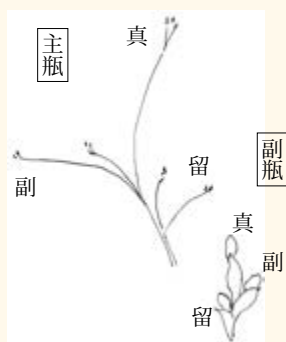
副瓶

チューリップ（百合科）

結晶釉小水盤（前田保則作）

黒芽柳は地味な花材だが、赤味を帯びた黒い花穂は個性的で、飴色の木肌にも品が有り、枝も素直で扱いやすい。生花にいけるなら赤椿を根締めにして和の雰囲気にとめるか、色鮮やかなチューリップと株分けや二瓶飾りにして、モダンな対比を楽しむことが多い。

作例では黄色のチューリップを静かな風情にいけ、黒芽柳に動きを与えている。チューリップの花色からは春の訪れが感じられ、馥郁とした葉は全体の瑞々しさを補ってくれる。





アララギの立花

万年青の前置

〈3頁の花〉

「富春軒初春の会」

挿花 桑原仙溪

花型 除真（行の花形）

花材 アララギ（二位科）

臘梅（臘梅科）

縞万年青（百合科）

菊（菊科）

椿（椿科）

花器 銅立花瓶

立花時勢粧の立花図には万年青が3図に描かれているが、すべて前置に使われている。立花秘傳抄には「藟」^{（おもと）}「老母草」の字が使われ「花道第一の秘伝の物」「師範なくては立つべからず」と書かれている。

万年青は山の奥にひっそりと自生している。野生の万年青を採集していけていいのは最小限の枚数を切ってもいけることができる、確かな目と腕を持った師範のみ、と流祖の時代も大切にされていたのではないだろうか。栽培品種であっても、万年青は別格の扱いをすべきなのだ。

以前、流派の長老がいた万年青の生花を見たとき、その神秘的な美しさに圧倒された。万年青は葉の一枚一枚に微妙な捻れや反りがあり、それをどう生かすかは経験がものをいう。いつの日か「出生玄妙」な姿を手に入れたい。



山茱萸の立花

仙溪

花型 除真（行の花形）

花材 山茱萸（水木科）

小手毬（薔薇科）

桃（薔薇科）

アイリス（菖蒲科）

松（松科）

椿（椿科）

猫柳（柳科）

小菊（菊科）

花器 広口陶花瓶

以前、2月末頃に稽古で立てた立花で、それぞれが開花した頃に撮影したのでとても色鮮やかだ。和花にこだわるなら正真には杜若（アヤメ）というところだが、同じ菖蒲科のアイリス（タツチアイリス）なら同じ温帯育ちで姿も清楚なのでよく似合う。

アイリスは開花すると結構な大きさになるため、真をしつかり除かせて正真の空間を大きくつくっておくようにする。アイリスの青紫色が山茱萸の黄色を際立たせている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
2 月号
No.644

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





白梅の立花
南天の胴

〈表紙の花〉

「富春軒初春の会」

挿花 朝倉慶佐

花型 除真（行の花形）

花材 白梅（薔薇科）

南天（目木科）

水仙（彼岸花科）

椿2種（椿科）

松（松科）

花器 天女模様銅器

指導 仙溪

南天の姿がうまく生かされている。とり合わせもいい。

蛇の目松の直真立花

〈2頁の花〉

「富春軒初春の会」

挿花 二井慶博

花型 直真（真の花形）

花材 蛇の目松（松科）

松（松科）

木瓜（薔薇科）

菊（菊科）

小菊（菊科）

枇杷（薔薇科）

花器 銅立花瓶

指導 仙溪

葉に斑が入る珍しい蛇の目松が際立つように、色数をおさえてある。静かな優しさを感じられる。



満作

仙溪

花材 満作（満作科）

花型 生花 草型 副流し

花器 広口陶花瓶

山では満作の花が咲いて黄金色に眩しく輝いているだろうか。そんなことを想像しながら、花が大きくて、太く立派な枝を一本買ってきて生花にいった。満作の細枝はジグザグに曲がっているの、太めの幹の後ろに添わせるようにするとい。枝数は少ないけれど、花が大きいのでこのくらいでも見応えがある。



桃と桜

仙溪

△2頁の花▽

花材 桃（薔薇科）

花型 草型 副流し

花器 陶コンポート

△3頁の花▽

花材 啓翁桜（薔薇科）

花型 草型 副流し

花器 天女文銅花瓶

古い時代に中国から日本に伝わった桃。3月3日の節句にむけてお雛様を飾り、女の子の健やかな成長を願って桃をいける。桃の若枝のように力強くのび、桃の花のように、美しく優しい中にも芯の強さを持つて育ってほしい。桃はお節句に相応しい花だと思う。

そして古より日本で優しい花を咲かせてきた桜。私達の心に寄り添うように枝を伸ばしてくれる。今では世界で花を咲かせ、多くの人に愛される桜たちのように、私達も優しさと思いやりを持つていたい。

そんな思いをこめて桃と桜をいけた。



斜め横から見た桜の生花の奥行き



こ
で
ま
り

椿

仙溪

花材

小手毬 (薔薇科)

椿 (椿科)

花型 二種挿し 草型 副流し

花器 青色釉陶鉢

バラ科シモツケ属のコデマリは、ほかの花材にはない曲線を描くところが魅力だ。いける時には足元を割

り、少し皮を削っておく。下方を真っ直ぐに撓め、真と副の枝を組み合わせてみて、いけあがりを想像する。

ツバキも主幹から出る横枝を生かすことを考えながら枝を観察する。どちらも元の姿を花型にどう生かすかがポイントとなる。





山茱萸の生花

仙溪

花型 草型 留流し

花材 山茱萸（水木科）

花器 銅薄端

2月末に京都駅新幹線コンコースに
いけたサンシユの生花を持ち
帰って撮り直した。春の花木が日に
日に開いてゆく様は、確かな春の訪
れを感じさせてくれる。

韓国の現代美術作家が訪ねてこら
れた時、韓国でもサンシユと呼び、
春一番に咲きますと教えてくれた。
彼はこの夏の二条城でのイベントに
出品すること。再会が楽しみだ。
花を愛する心が人と人を繋ぐ。

横から見た奥行き





連翹と椿の生花

仙溪

花型 草型 副流し
花材 連翹（木犀科）

乙女椿（椿科）

花器 煤竹竹筒

連翹は立華時勢粧にも見られる落葉低木で、春の陽光を感じる黄色い四弁花が、しなやかな枝に連なつて咲く。「翹」という字には「反る、はねあがる」という意味があり、レンギョウの飛び跳ねるような枝の姿を連想させる。ところが、レンギョウの中国名は黄寿丹で、中国ではオトギリソウの仲間を連翹と呼んでいるそうだ。古く漢方薬として日本に來た時に、よく似た実なので間違えてしまったようだ。たとえ誤用だとしても、連翹の字とともにこの花を私達は愛している。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
5 月号
No.647

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



夏櫨 なつはぜ

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花材 夏櫨(躑躅科)

花器 ペルシャ緑釉花器

(宇野仁松作)

表紙の生花はナツハゼである。撮影した後、華道京展に出品した。細枝が複雑にからみあつた立派な枝だったが、おそらく特別な育て方がされたのだろう、枝は粘り強く、3週間経った現在も、家の玄関で元気に葉を茂らせている。

もちろん水揚げには注意を払っている。足元はよく割り、皮を削っている。そして幸いにも、ほとんど撓めずに美しい姿になつてくれた。この木を何年もかけて育てた人と、それを私に届けてくれた花屋、そして私。そんな繋がりに感謝せずにはいられない。

華道京展では敦盛草との二瓶飾りで出品した。(写真①)

アツモリソウは青いカットガラスにかけたが、広い流派席の中でキラリと際立っていた。会期後半に白根葵に変えたが、どちらも好評をいただけてはつとしていた。

器の選択は副家元と相談することが多い。二人で考え、良い組みあわせになった時、喜びを分かち合える。





夏櫨^{なつはげ}

紫蘭^{しゅうらん}

(写真②)

仙溪

花型 生花 二種挿し

花材 夏櫨^{なつはげ} (躑躅科)

紫蘭 (蘭科)

花器 青彩陶花瓶 (藤平正文作)

表紙の夏櫨の生花をいけた後で、使わなかった枝を用いた一作。

平安神宮献花大会 (4月14日、16日、平安神宮 額殿) に出品した花である。

かなり暴れた枝だったので、ざっくりと生花の形に留めてから、刈り込んでバランスを整えた。

白地に青い模様の器に若葉の緑、そこへ薄紅色の紫蘭を2本のぞかせて、季節の色を加えた。



木苺と芍薬の生花

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 木苺（薔薇科）

子株 芍薬（牡丹科）

花器 紺色釉水盤

木苺（種名は構苺^{かじいちじ}）は出荷量も増えてきて、若葉の時期に生花にもできるようになり、白い花が次々に咲いてくれる。黄色くなつた葉や、花や蕾が萎れたらこまめに取り除く。子株には小型の花を選び、季節の彩りを添える。



夏櫨の立花

△11頁の花▽

仙溪

花型 除直立花

花材 夏櫨（躑躅科）

山芍藥（牡丹科）

裏白の木（薔薇科）

下野（薔薇科）

姫百合（百合科）

撫子（撫子科）

擬宝珠の葉（百合科）

花器
紺色釉水盤

立花研修会の作例。正真のヒメユリと請のヤマシヤクヤクは受筒に挿している。ヤマシヤクヤクの実が花材として栽培されるようになったおかげで、まれに花も切り花で売られる。ギボシで受筒を隠したため、写真では不自然なシルエツトになってしまった。ギボシは低い位置のみに使うべきと反省。この作例であれば、受筒は小葉の葉蘭や著莖、檜扇の葉で覆うようにすればよかっただろう。



創立50周年記念
日本いけばな芸術展

5月10日(水)～17日(水)
東京日本橋高島屋8F

桑原仙溪

生花／ジャーマンアイリス

花器／金彩陶水盤 竹内眞三郎作



花菖蒲の生花

ハナショウブ

仙溪

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

花型 行型

花器 黒波文金彩陶水盤

(竹内眞三郎作)

東京の花展でジャーマンアイリスの生花をいけたこの器に、今度は白花の花菖蒲をいけてみた。形も模様もモダンな器なのに、葉組の生花がよく映る。

花は真、内漆、副、胴、留に入れ、葉組のみの副沈みと控を加えて、七体でいけている。花菖蒲の生花にはいい花と、それ以上にいい葉が必要である。



映画「花戦さ」

映画「花戦さ」はもうご覧になっただろうか。池坊専好（初代）が主人公となって、千利休や豊臣秀吉と、いけばなを通じてどのように関わったかが描かれている。

映画の中では、「立花」を中心に、様々な花をいけるシーンを観ることができる。当時の人達がどんなふうに花をいけていたか、とりわけ専好が花をいける心のありようが、ひしひしと伝わってくる。

専好は野村萬斎さんが演じている。佐藤浩市の利休との会話が特に印象に残った。まだの方は是非。

七竈ななかまどの生花

△9頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し

花材 七竈（薔薇科）

花器 銅製手付花器

よく葉の茂った太枝1本を捌きいていけた。足元の太いところを最初に入れ、その後ろから枝を出してゆく。



横から見た奥行き



鉄砲百合の立花

△11頁の花▽ 仙溪

花材 鉄砲百合（百合科）

トルコ桔梗3色（竜胆科）

カーネーション2色

（撫子科）

オクロレウカの葉（菖蒲科）

鳴子百合（百合科）

スモークグラス（稲科）

花器 白黒陶花瓶

草花だけで立てた立花。洋花であつても、同じような環境に咲く植物を組み合わせると、自然な趣の立花になる。



木瓜の立花 〈10頁の花〉

京華会・朝倉慶佐出品作

花材 木瓜ぼけ（薔薇科）

杜若かきつばた（菖蒲科）

下野しもつけ2種（薔薇科）

松（松科）

イボタノキ（木犀科）

花器 銅立花瓶

指導 仙溪

太い見事な木瓜である。朝倉先生が出品されていた時は、薄紅色の花が賑やかに咲いていた。撤花後、花は落ちてしまったが、写真に撮らせていただいた。真から分かれ出た請の下がり枝と、右側に張り出た請の枝が、絶妙なバランスを作っている。



山桃の生花

△4頁の花▽

仙溪

花型 草型 副流し

花材 山桃（山桃科）

花器 銅製手付薄端

立花秘傳抄の石楠花の解説に、石

楠花をいける場合に楊梅の葉を使う

といいと書かれている（今号6頁）

が、楊梅はヤマモモの漢名で、ヤマ

モモとシヤクナゲの葉の付き方はよ

く似ている。

ヤマモモは東アジアの暖地に育つ

常緑高木。実は赤く熟し食べられる。

中国には樹齢千年に及ぶヤマモモも

あるそうだ。

大枝から枝とりしてつけたが、折

れやすいので注意を要する。



母^{つが}の生花

△5頁の花▽

仙溪

花型 草型 留流し

花材 母（松科）

花器 銅製手付立花瓶

ツガ（トガ）はマツ科ツガ属の常緑性針葉樹で、マツ科モミ属のモミによく似るがモミのように葉先は尖らない。またイチイ科のイチイ（アラギ）にも似るが、実が異なる。花展でいけたあと、家の玄関に飾った。重みがあるので花器は丈夫で安定感のある銅の立花瓶を選んだ。貴重な花材に感謝をこめて、水を毎日入れ替えることが肝心。

檜扇の生花

△写真①▽

花型 行型

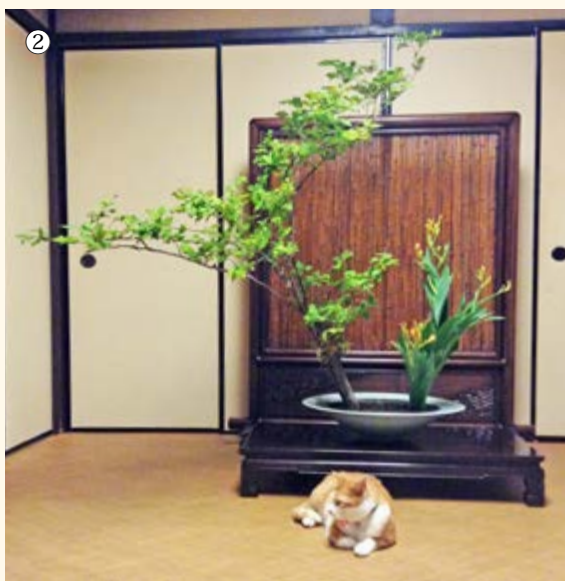
花材 檜扇（菖蒲科）

花器 黒釉水盤

檜の薄板をつないで作った檜扇

と呼ばれる道具は、奈良時代に日本で生まれたとされているが、おそらくもつと以前から、現在ヒオウギと呼ぶこの花には悪霊を退散させる力が備わっていると考えられていたようだ。「古語拾遺」というものの中に、「烏扇」の名前で出てくる。

それによると、昔、神代に大地主神（おおとこぬしのかみ）が田をつくる際に、御歳神（みとしの



かみ）の怒りによって苗葉が枯れてしまった。その祟りを去らせる方法の一つに「烏扇を以て扇げ」と告げられ、そのとおりにして苗

葉は茂り、年穀も豊かに実った、とある。

だとすると、後の時代に、貴族が厄除け魔除けのために、その烏扇の力にあやかっ、それに似せて作ったものが檜扇で、それを常に身につけていたとも考えられる。

ひよつとするとこの花が、すべての扇子や扇のルーツなのかも。古の日本人は、今よりもつと自然に学ぶ謙虚な心を持っていたのだと思う。

夏櫨と檜扇の生花

なつはぜ

ひわうぎ

△写真②▽

花型 生花株分け

花材 夏櫨（躑躅科）

檜扇（菖蒲科）

花器 砥部焼青磁鉢（大西光作）

京都では昔から、祇園祭の花として檜扇をいけて飾る。いけられる檜扇のおよそ半分は、京都府北部の宮津市で栽培されたものだそう。茎がよく反り返った「黄龍」「真龍」という品種で、葉も整って美しく、生花をいけるのに向い

ている。

八坂神社前にできた祇園祭ぎやらしいでの檜扇展示会に、青磁の大きな水盤を器にして、ナツハゼとヒオウギで株分けの生花を出品した。出品中はナツハゼに青紫色の鉄線を絡ませていたが、広い水面に涼しげに映っていた。

写真は、会期を終えて持ち帰り、玄関にいけなおしたところ。すっかり傷が治ったレモンちゃんが、器の水を飲みに来ては、花の前で風流を楽しんでくれていたようだ。



七竈の立花

仙溪

花型 立花 行の花形
花材 七竈の紅葉(薔薇科)

雪柳(薔薇科)

木苺(薔薇科)

竜胆二色(竜胆科)

スプレー菊(菊科)

三島紫胡(芹科)

アゲラタム(菊科)

花器 陶花瓶

山では夏に一部分紅葉した枝を見つけたことがあるが、これは病葉と云って、病気や虫によって弱った葉が変色したもの。近年、初夏から初秋にかけて赤く色付いたナナカマドの枝が売られるようになったが、病葉の仕組みを利用して、枝を傷めてつくるぞうだ。秋の紅葉は葉が枯れやすいが、こちらは長く保つ。
作例では垂れ下がる副のナナカマドと、立ち上る請のリンドウの対比を大切に立てた。



横から見た奥行き



野茨と鶏頭のいばら けいとう

仙溪

花型 生花 株分け

花材 野茨（薔薇科）

鶏頭（鳶科）

花器 陶水盤

ノイバラ3本とケイトウ3本で、生花の稽古をした時の見本にいった花。自分で花屋で枝を選ぶと、いけやすい枝を選んでしまうが、稽古の花は花屋が仕入れた中から人数分に分けられたもので、中にはいけにくい枝も混じる。それをなんとかするのもまた楽しい。

野性味のある赤い実には、ケイトウの花色が鮮やかに寄り添い、その瑞々しい葉もなくはならない存在を感じさせてくれる。

ノイバラは役枝の選択が重要となる。自然の躍動感を大切にして、花型に生かすこと。小枝の整理をどうするか。できるだけ残しつつ、最後に切るべき枝を切る判断も大切だ。手にした枝でベストを目指す。花型は全体のバランスに注意する。水際が美しく、生命感にあふれていること。このことは、どんな生花の場合も大事にしたい。

生花の基本が身についたら、是非とも楽しんでいけてほしい組みあわせである。



菊の生花

仙溪

花型 生花 真型

花材 菊（菊科）

花器 天女模様銅花瓶

「聖人君子」とか「君子危うきに近寄らず」の君子は、中国での理想的人格の象徴の名だ。清らかで高潔、学識と人格に優れた人。高い徳があり人々の模範となる人のことだ。

その君子のつく言葉に「四君子」がある。君子に匹敵する植物を春夏秋冬から一つずつ選んだもので、蘭、竹、菊、梅の四つを四君子と呼ぶ。

この内の竹と梅と蘭（野生種）が簡単にいけることができないのに対して、菊はとても身近な花材だ。秋には様々な園芸種の菊をいけることができるが、育てる人がいて、活けて楽しむ人がいる、大変豊かな文化だなとしみじみ感じている。

さて、菊の古典花となると、どんな菊でもいい訳ではない。生花には撓めに耐えられる粘り強さと葉の良い品種。立花には倒して育てたものが必要だ。

そして古典であれ現代であれ、菊を自然調に活ける時には、君子の品格が感じられるように心がけたい。



洋花の生花

仙溪

花型 生花 株分け
花材 ピンククッション

(ヤマモガシ科)

クルクマ (生薑科)

花器 練込陶水盤

夏から初秋の、花が保たない時季にも、いけて長く楽しめる生花の作例。

ピンククッションもクルクマも、一種だけではなにか物足りないが、このように水盤に株分けで活けると、動きや潤い、色彩を互いに補い合ってくれる。

クルクマは10月頃まで切り花が売られているし、ピンククッションも手に入りやすい。一度活けてみて、その面白さを実感し、来年以降の夏の作例として覚えておこう。



水仙一色立花

△4頁の花▽

仙溪

花型 立花 行の行形
花材 水仙（彼岸花科）
花器 陶花瓶

昨年は二条城の二の丸御殿で水仙の立花を撮影する機会を得た。歴史を感じる場所にあわせて、立花時勢粧の絵図にある水仙一色立花を再現してみたが、葉が自由奔放に伸びていて、しかも絶妙なバランスを保っているのに驚かされた。

今年の1月末、淡路島の灘黒岩水仙郷へ自生の水仙を見に行った。180年前に海岸に漂着した球根を漁師が山に植えたのがはじまりで、今では500万本の野生の水仙が斜面に咲き乱れる。

大雪のあとで倒れているものもあったが、再び立ち上がろうとする姿は立花図の水仙そのものであった。波打つように伸びるものや、180度方向を変えるもの。自然がつくる造形は予想を遙かに越える。



淡路島の灘黒岩水仙郷にて



丁字草 ちようじそう やまとりかふと
山鳥兜

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 丁字草 (夾竹桃科)

山鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶水盤

楓の紅葉、銀杏の黄葉、ほかにも様々な植物の葉が秋色に変わる。きつと皆さんにも、この季節になると心待ちにする色があるのではないだろうか。

四国の花展でいけたオカトラノオの紅葉も心に残る色彩だった。

作例の丁字草も、その繊細な美しさは他の枝には無いものがある。黄色、オレンジ色、赤色、いろんな色の葉が混ざっている。ヤマトリカブトの紫色とは相性がいい。水盤で株分けにして、秋の輝きを楽しんだ。



赤い実と紅葉の立花

仙溪

花型 立花

花材 雪柳(薔薇科)

梅擬(繡の木科)

伊吹(檜科)

木苺(薔薇科)

糸菊2種(菊科)

二輪菊2種(菊科)

花器 陶花器

園芸種の梅擬は枝が短くて実が大きい。伸びやかさに欠けるので、紅葉した雪柳で自然味を補った。

立てて一週間たつたところで撮影したが、菊が大きく開いて華やかな秋色の立花になった。



横から見た奥行き



横から見た奥行き



絵の画題で「歳寒三友」とは、松・竹・梅、もしくは梅・水仙・竹である。どれも冬の寒さに耐える植物で、節操を曲げない士人の精神を象徴する意味がこめられている。士人とは高い教養と徳を備えた人のこと。水仙は凛とした姿にしたい。5本のうち花は真・胴・留に低く入れている。

花型 生花 株分け
花材 水仙 (彼岸花科)
小菊 (菊科)
花器 三島陶鉢

水仙と小菊の株分け
仙溪





生花二瓶飾り

仙溪

花材 ヒマラヤ杉（松科）

スプレー薔薇（薔薇科）

花器 杵形陶花瓶

陶抹茶碗

四国の花展でいけたヒマラヤスギは、大切に持ち帰って、今度は生花にいけ直した。生花の基本形から少しはみだしていても、自然味を損なわないよう、ある程度の枝は残していけている。

小振りになったので、赤いバラと一緒に飾ることにした。真に2輪並んでいるのは大らかに考えることにしよう。

ヒマラヤスギは日本では明治時代初期から栽培がはじまったそうだ。原産地はヒマラヤ北西部からアフガニスタン。建築材にもなり、油分が薬やアロマに利用されている。

日本の各地に植えられているが、昨秋の台風で京都府立植物園の35mのヒマラヤスギが倒れたと聞いた。高松の栗林公園にも大きなヒマラヤスギがあったので心配している。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
2月号
No.656

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



竹の立花 △表紙の花▽

「富春軒初春の会」

插花 杉浦慶弥

花型 直真すくしん（真の花形）

花材 真竹まだけ（稻科）

金明竹きんめいちく（稻科）

木瓜ぼけ（薔薇科）

赤芽柳あかめやなぎ（柳科）

梅つが（松科）

水仙ひがんぼな（彼岸花科）

寿松ことぶきまつ（松科）

椿つばき（椿科）

枇杷びわ（薔薇科）

花器 銅立花瓶

指導 仙溪





南天^{なんてん}の立花 〆10頁の花〃

「富春軒初春の会」

插花 桑原仙溪

花型 除真^{のきしん}(行の花形)

花材 南天^{なんてん}(目木科)

臘梅^{ろうばい}(臘梅科)

梅^{うめ}(松科)

水仙^{すいせん}(彼岸花科)

松^{しょう}(松科)

花器 銅立花瓶

ナンテンは「難を転ずる」縁起の良木。



譲葉の立花 ゆずりは 〈11頁の花〉

「富春軒初春の会」

挿花 寺川慶枝

花型 除真（行の花形）

花材 譲葉（譲葉科）

松（松科）

梅2種（薔薇科）

千両（千両科）

菊（菊科）

小菊（菊科）

枇杷（薔薇科）

花器 天女模様銅器

ユズリハは若葉が出たのを確かめるように落葉する。家が代々続くようにとの願いをこめて。



前



サザンカ

仙溪

花材 山茶花(椿科)

花器 環付銅花瓶

「京都名流いけばな展」出品作

2月に若生した古木の山茶花を生花に付けて出品したので、記録として掲載しておく。

サザンカは秋のはじめに咲きだし、冬の終わり頃まで長い間咲き続ける。他の花がほとんど無い時季に咲いて、私達の心を温めてくれる、そんな花である。

立花の場合、サザンカはツバキと同様に前置などの下段に使う。上段の役枝に使っても、あまり良い感じにはならないものである。

生花の場合も秋の実ものや、冬の柳などの根締めにしたがうが、ある程度立派な枝であれば一種でいけて、サザンカの風情を楽しむことができる。

写真では枝葉の整理が足りないように感じるが、自然の勢いを優先している。古風な銅器とも合っていたが、口が小さいため水の減り方が早く、毎日通ったけれど常にベストな水量を保てなかったことが反省点である。やはり生花は水面から立ち上る水際が大切な見せ場なので、花器の選択にも注意したい。



啓翁桜
けいおうざくら

仙溪

花材 啓翁桜（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

ケイオウザクラは中国のミザクラ（実桜）を台木にして、ヒガンザクラ（彼岸桜）を接ぎ木した中から、枝変わりとして生まれたそうだ。いわば日中合作の桜である。

私達が日頃いけている花の多くも、元は様々な国の自然が、様々な国に渡り、様々な人によって作られてきたものである。トマトやジャガイモやカボチャといった野菜と同様に、それぞれの来歴を辿ってみると、世界各地の自然とつながりがあって面白い。

野菜を違う土地で育てると形も味も変化して、産地ごとに独特の品種が生まれたりする。植物は環境に適応するための努力を惜しまないということか。

私達人間も違う国の文化と融合したり、他国で自分自身が変わるのを感じたり、植物と同じだなと思う。自国の文化を守ること大事だが、進化するための変化もまた大切に思う。



横から見た奥行き

出逢い花 (31)

仙溪

あぶらちゃん ぐすのき
油瀝青 (楠科)

椿 (椿科)

花器 陶扁壺 (八木一夫作)

久しぶりの出逢い花。

アブラチャンのひねた枝に赤椿を出逢わせた。

アブラチャンはアオモジやクロモジと同じくクロモジ属の落葉低木だが、花材として出るのは稀なようだが、跳ねるような枝の形がくつきりに見えるようにしている。

ずんぐりした器は片側が少しへこんで、金環食と名付けられた田が黒い線で象嵌されている。小指が入るくらい小さな口なので、出逢い花むきの器である。

金環食とは日食のこと。太陽に月が重なる稀有な現象を器に描くことで、神秘的な力を与えているように感じる。こういう器には味わい深い自然をいけたいと思う。

横から見た奥行き





桜と連翹の立花

仙溪

花材 啓翁桜（薔薇科）
連翹（木犀科）

照り葉椿（椿科）

椿（椿科）

檜葉（檜科）

喇叭水仙（彼岸花科）

小菊（菊科）

花器 銅立花瓶

NHKで東北の桜をテーマにした番組を見た。北国では桜の開花を心待ちにする気持が強く、多くの桜の名所を生んできた。その桜の周囲には黄色の花が咲いている。菜の花や連翹だ。黄色は春の温もりを感じさせてくれる。

立花時勢粧では、桜には他の花の咲くものを交えないこととされているが、彼岸桜や啓翁桜のような小輪の桜には品良く春の花を添わせたい。山里の春を想い描いて、啓翁桜と連翹を主な役枝に配して立ててみた。

春の立花では正真の花に悩む。桜の立ち枝や伊吹などを正真にしてもいいが、今回は人里の庭に咲くラッパスイセンにした。横から見た奥行き





啓翁桜とチューリップ

仙溪

花型 生花 株分け

花材 啓翁桜 (薔薇科)

チューリップ (百合科)

花器 小判型陶水盤 (伊藤典哲作)

春の公園で見かけるようなとりわけ。生花にもそんな楽しみ方があつていい。啓翁桜を主株に、チューリップを子株に付けて株分けにした。

剣山で枝物の生花をいけるのは、かえって難しいかもしれないが、太めの幹をうまく使えば足元も整いやすい。水盤にいけることができて花器の選択の幅がひろがる。作例のように株分けで季節の草花を合わせることもできるので、時々は稽古しておきたい。

横から見た奥行き





ツクシドウダン

仙溪

花型 生花 草の花形 副流し
花材 ツクシドウダン 筑紫満天星（躑躅科）
花器 銅花器

ドウダンツツジは山地の岩場、特に超塩基性の蛇紋岩地帯に多く見られる。日本は概ね弱酸性の土壌なので、蛇紋岩のような特殊な地質で育つ植物は限られる。そのドウダンツツジの中のサラサドウダンの仲間にツクシドウダンがあり、九州の筑紫山地に見られるのでこの名がある。花は鐘状で花冠が深く5裂する。華道京展では投入にしたが、一種で生花にすると、幹の姿が見えて又別の趣になる。

横から見た奥行き





七竈の生花

仙溪

花型 草型 副流し

花材 七竈 (薔薇科)

花器 雲藍條文花器 (森野泰明作)

この花器に水を張ると、山深い谷川の、心地よい風が吹いてくるように感じる。その心地よい水面を見せるいけ方が生花であり、立花であるとも云える。ナナカマドの若葉の清々しさが器に映える。

横から見た奥行き





裏白の木

彩の国さいたま出品作

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型

花材 裏白の木（薔薇科）

花器 陶コンポート（宇野仁松作）

裏白の木の緑白色の葉色が会場
で人目を引いていた。

古典いけばなは型が決まっている
が、その中で花材の個性をどう生か
すかが問われる。厳しい自然の中で
育った逞しい枝には風格が備わる。
それを損なわないように型にはめる
のが難しかった。



アガパンサス

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 アガパンサス（彼岸花科）

花器 ブルーガラス花器

（バーティル・バリーン作）

アガパンサスの花は型通りに配置すると葉と重なってしまうので、胴と留の代わりに真囲と控に入れている。青いガラス花器と合っている。

横から見た奥行き





ブルーベリー

△ 9 頁の花 ▽ 仙溪

花型 生花 草型

花材 ブルーベリー (躑躅科)

花器 銅薄端

名古屋の先生から庭で育ったブルーベリーを頂いたので、生花にしてみました。実は熟すと落ちやすい。青いうちは水揚げも良く、いけて3週間以上経つがまだまだ大丈夫だ。

横から見た奥行き





輸入花材の生花

リュカデンドロン（銀葉樹）は南
アフリカ原産、ヤマモガシ科の常緑
樹。長めの枝なら生花にできる。
ドラセナ・ブラックリフは千年
木（コルデイリネ）の仲間とされる。
蘭を合わせて色を加え、シヤガ
を借葉として添えた。

リュカデンドロン

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 リュカデンドロン

（ヤマモガシ科）

子株 ミニ薔薇（薔薇科）

花器 陶水盤



ブラックリーフ

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 二種挿し

花材 ドラセナ・ブラックリーフ

(竜舌蘭科) 著栽 (菖蒲科)

ミニ胡蝶蘭 (蘭科)

花器 ガラス花器



横から見た奥行き



藪山査子
やぶさんざし

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 藪山査子（雪の下科）

花器 螺鈿漆塗り花器

ヤブサンザシのいい枝に出合ったので、自然のままの姿を生かして生花にいった。

ユキノシタ科もしくはスグリ科、スグリ属の落葉低木。雌雄異株で春に黄緑色の花が咲き、秋に実が赤熟する。野性味のある花材である。

横から見た奥行き





下がる上がる

△ 9 頁の花 ∇ 仙溪

花材 垂柳檜葉 (檜科)
岡虎の尾 (桜草科)

花器 銅花器

花展に出品した生花をいけ直したもの。花展ではトリカブトを覗かせていたが、オカトラノオに変えたら随分良くなった。スイリユウヒバは糸状の葉が枝垂れるので、勢いよく登る姿の花の方が相性がいいようだ。下がる物には上がる物を。

横から見た奥行き



永観堂禅林寺新法主晋山式
10月14日、永観堂での晋山式に立
花一對を納めさせて頂きました。





山茱萸の実
さんしゆゆ

仙溪

花型 草型 副流し
花材 山茱萸（水木科）
花器 銅花器

この山茱萸は名古屋の生徒さんが切ってきて下さった枝だ。大きな束を抱えて新幹線に乗って。葉がいっぱい付いていたのを元氣そうな2枚だけにした。こないけ方ができるのも生徒さんのお蔭だ。たわわに付いた赤い実が美しい。

横から見た奥行き





万年青 九葉一果

仙溪

花型 行型

花材 万年青 (百合科)

花器 三つ脚青磁水盤

正月花の参考に。葉のふちに白い斑の入る都城と呼ばれる品種。このような大葉系のオモトは薩摩地方が発祥の地とされるので薩摩万年青と呼ばれている。赤い実の茎には割り箸を添えて固定しフローラルテープで巻いておく。

横から見た奥行き



留
流し葉



副



水仙一色立花 仙溪

花型 水仙一色 直真立すくじて
 花材 10頁 水仙 小菊 著莪
 11頁 水仙 寒菊
 花器 陶花器・銅花器

「立花時勢粧」の絵図をもとに水仙一色立花を立てた（10頁の花）。葉先まで針金を通して絵図と同じ形にしてみたが、かなり自由奔放な姿である。ただこれは模倣であって立花本来の目指すものではない。流祖の富春軒仙溪も「立花秘傳抄」で水仙の葉には針金を通さず、細い竹串で出口を繞めるのみと戒めている。すなわち絵図の流麗な葉の動きは元々自然に備わったもので、人工的に形をつけたわけではないのだ。



積雪の後で捻れながら逞しく育つ水仙。淡路島の黒岩水仙郷にて。

横から見た奥行き（10頁の花）





とはいえ私達の手に入る水仙は素直なものばかりなので、そういう水仙本来の姿を立てると11頁のようになるがこれはこれで良さがある。

立ててから運ぶのには葉先まで針金が入っていると安心なのだが、出口から先は針金を通さずに自然の姿を生かすようにするべきだろう。いつか水仙郷で見たようなくせのある水仙で、流祖のように立ててみたい。

横から見た奥行き（11頁の花）





赤芽柳・水仙

△ 4 頁の花 ▽ 仙溪

花材 赤芽柳（柳科）

水仙（彼岸花科）

花器 四彩塗面取高坏（河井透作）

昨年は華老の鈴木秀映先生、竹中慶敏先生、そして河野慶雅先生、坪井二葉先生、清水慶富先生、成瀬慶草先生、仙石慶綾先生、中村慶美先生が他界された。花道へのご尽力に感謝し、謹んでご冥福を祈ります。先生方から受け継いだ技と心を流派の皆様と共に大切に次へ伝えます。



エゾマツの立花

〈10頁の花〉 仙溪

京都新聞11月9日(金)夕刊

『明治』を彩るいけばなより写真転載

(撮影・水沢圭介)

背景 旧三井家下鴨別邸

主屋1階座敷床の間

花型 立花

花材 蝦夷松

梅

梅擬2種

水仙

貝塚伊吹

満天星

椿

木瓜

花器 銅立花瓶

京都新聞の紙面で、明治時代の面影を残す建物に花をいけて紹介する連載が始まっている。花が飾られた場には植物の伊吹が満ちて命が宿り、その場で暮らしてこられた人物にも自然に想いが膨らんでゆく。

この床の間の掛け軸に描かれているのは江戸時代前期の商人、三井中興の祖といわれる三井高利夫妻の像で、のちに三井財閥となる前の基礎をつくった人物だ。

写真には写っていないが床柱にはピンロウジュ(檳榔樹)が使われている。南国の椰子の仲間、床柱に使われるのは珍しい。

部屋の格に合わせて、エゾマツと紅白のウメモドキで立花を立てた。



ツガの立花

△11頁の花▽

京都女流京華会いけばな展

朝倉慶佐先生出品作

花型 立花

花材 梅

梅擬

水仙

貝塚伊吹

椿

紫蘭

花器 銅立花瓶

指導 仙溪

ツガはマツ科ツガ属の常緑樹。線状で扁平な葉の先がやくぼむ。イチイに似るがイチイの葉先は尖るので見分けがつく。太い幹は砂物むきだが、うまくバランスがとれている。

横から見た奥行き





竹真の立花

仙溪

花材 金明竹(稲科)

白梅(薔薇科)

松(松科)

五葉松(松科)

黄水仙(彼岸花科)

椿(椿科)

小菊(菊科)

花器 銅立花瓶

年末に稽古で立てた立花で、写真は2週間目。そして一ヶ月を経た今も水仙と小菊をかえて玄関に飾っているが、白梅が美しく咲き、キンメイチクの葉もまだ生き生きしている。なんとまあ、である。暖房の無い日本家屋の玄関の間では、冬の間花がよくもつが、それにしてもキンメイチクの水揚げの良さには驚かされる。

横から見た奥行き





被災地の焼き物

仙溪

花材 白梅（薔薇科）

椿（椿科）

花器 陶花瓶（金野光賀作）

この花入れは広島県尾道市の陶芸作家によるもので、昨秋京都高島屋での京都新聞チャリティーで入札して手に入れた。作者の金野さん（77）は昨年7月の西日本豪雨の時、裏山からの土石流に約2500点の作品と登り窯も流されてしまった。その時奇跡的に無事に残ったのがこの花入れである。

金野さんはその後、難を逃れた自宅のガス窯で作品を作られているそうだが、再び登り窯で焼き物をつくるという強い意思を持たれている。いい作品を作り続けるという創作意欲が金野さんを支えている。そんな金野さんの奇跡の花入れに、心を込めて花を生けた。

横から見た奥行き





山茱萸^{さんしゅゆ}の生花

仙溪

花型 草型 副流し

花材 山茱萸（水木科）

花器 五角陶水盤

これは昨年1月の稽古でいけた生花の約一ヶ月後の写真だ。いけた時は蕾だったサンシュユの花が満開に咲いている。サンシュユの黄色い花は部屋の中でもよく目立ち、そこだけ春の温かな日差しがあたっているようだ。

サンシュユの太枝を使いながら伸びやかに横へ枝を出すには竹筒では軽すぎてアンバランスになってしまった。重みのある水盤を選び、大きめの剣山でいけて、最後に小石で剣山を隠した。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
3月号
No. 669

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



あかばなまんさく
赤花満作

〈表紙の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 満作（満作科）

藪椿（椿科）

花器 陶花瓶「追想」（小川欣二作）

マンサクは早春に黄色の糸状4弁花を枝一面に咲かせる。マンサクより花が大きいシナマンサクは花色が濃く甘い香りがする。マンサクとシナマンサクの交配で多くの品種が生まれている。

アカバナマンサクは異国の感じがする。西洋的な図柄の花瓶に椿を合わせて生花にした。

かわつぎくら
河津桜

〈9頁の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 河津桜（薔薇科）

花器 銅花瓶

京都駅での河津桜の生花。枝本来の姿を生かしてのびのびといけた。



初日の河津桜。上の写真は7日目。





コデマリ チューリップ 仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 小手毬 (薔薇科)

チューリップ (百合科)

花器 陶水盤

コデマリの生花は枝振りを生かすことが肝心。真の枝は中心線をまたいで垂れ下がるが、枝の上部が中心に乗るようにバランスをとる。撓める時は枝の気持になってストレッチすることく撓めるといい。

横から見た奥行き





利休梅 りきゅうばい
薊 あざみ

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花株分け

花材 利休梅（薔薇科）

薊（菊科）

花器 陶水盤

リキウバイは中国原産の落葉低木。バラ科・ヤナギザクラ属で明治時代に渡来した。

あばれた枝を生花にしたが、撓めたところもよく水が揚がついていた。アザミと株分けにしたが、相性が良さそう。

横から見た奥行き



第70回 京友禅競技大会 挿花

松除真立花

仙溪

花型 松除真立花

花材 松(松科)

晒木

桃(薔薇科)

椿(椿科)

紫蘭(蘭科)

橘(蜜柑科)

花器 銅立花瓶

元禄時代の京都において人気を博した扇絵師、宮崎友禅斎の描く画風を着物の意匠にとり入れたのが友禅染めのはじまりとされる。この手描友禅に対して、明治時代以降には型紙に模様を彫って染める型友禅が加わり、京の友禅染めは飛躍的な発展をとげた。

京友禅協同組合からのご依頼で、京友禅の展示会に、京都いけばな協会から会長の私と芦田一馬常任相談役が挿花させていただいた。

私が白地の着物の前に松の立花を飾り、芦田先生が黒地の着物の前に桜の生花をいけられた。芦田先生の桜の生花は、まさに着物に染められた絵柄のように美しかった。

展示会場にはインクジェットで染めた着物もあつて驚いた。着物の普及に一役買ったろうが、大切なのは作り手のセンスなのは間違いない。着物もいけばなも、伝統を現代に生かそうとする情熱と、基本を習熟した上での洗練された感覚が求められる。



葉蘭生花 はらん
 花型 生花 行型
 花材 縞葉蘭 (百合科)
 花器 陶花器
 〆9頁の花〆 仙溪



日本いけばな芸術中部展
テーマ「新たな歴史への夢」

会期 4月10日(木)～15日(月)

会場 松坂屋名古屋店

桑原仙溪

生花

どうたんつじ ぼけ
満天星 木瓜

織部花器(鈴木徹作)



檜扇の生花

仙溪

花型 生花 行型

花材 檜扇 (菖蒲科)

花器 練込陶水盤

「古語拾遺」の中に、ヒオウギの古名「烏扇」が出てくる。昔、神代に大地主神が田をつくる際に、御歳神の怒りによって苗葉が枯れてしまった。その祟りを去らせる方法の一つに「烏扇を以て扇げ」と告げられ、そのとおりにして苗葉は茂り、年穀も豊かに実った、という内容だ。風をおこせる姿形と、花のあとにできる漆黒の実(射干玉)に神秘の力を感じていたのだろう。

おそらく貴族が厄除け魔除けのために、烏扇に似せて作ったものを身につけていたように思われる。板で作った檜扇なのだと思う。

だとするとこの花があったから扇子や扇が生まれたとも言える。京都の祇園祭には昔からヒオウギをいける習わしがあるのも、疫病退散の願いが込められているのだと納得がゆく。平安を願ってヒオウギの生花をいけた。





乞巧簀とカジノキ

キイチゴの名前で出回っている植物は正確にはカジイチゴという名前である。バラ科キイチゴ属の落葉低木おもに西日本に分布し温暖な気候を好む。白い花が咲いたあとにできるオレンジ色の実は食べられる。

漢字では「梔母」または「構母」と書くが、クワ科のカジノキに葉が似ているのでこの名がつけられた。

カジノキは古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧簀」という行事が奈良時代に日本に伝わった。牽牛・織女の二星が天の川を渡って逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。カジイチゴに古来の伝承があるわけではないが、歴史に縁のあるカジノキに因んで、技巧上達を願いながらけるのも一興ではないだろうか。

木苺と薔薇

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 木苺「構母」(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

花器 小判型陶水盤

近年、カジイチゴの栽培が増えてきたように感じる。枝を選べば生花にできるし、夏の暑さにも強いのが有難い。



石化金雀児せつかえにしだ

〈10頁の花〉 仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 石化金雀児（豆科）

花器 煤竹竹筒

「金雀児」「金雀枝」と書くが日本が中国が原産のように思うが、エニシダは地中海沿岸原産の低木である。晩春に黄色の蝶型の小花が枝一面に咲くと、黄色い繁みがあちこちに現れる。古い学名の「ゲニスタ」が訛ってエニシダとなった。小低木という意味だそう。ちなみに英名はブルーム（ブルーム）で、この枝で簪をつくっていた。

枝が帯化した「セッカエニシダ」と呼ばれるのは白花品種のシロバナエニシダである。

エニシダの生花は細枝の付き方を要所所所に生かす工夫が必要となる。櫛で解いたように線をそろえていけるには技術と根気がいる。

セッカエニシダの場合、枝先の石化した姿を生かしておよその形をつくり、その間に細枝で厚みをつけてゆく。





菊の株分け生花

△11頁の花▽ 仙溪

花形 生花 株分け

花材 糸菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 かいらぎ釉陶水盤

(木村盛伸作)

菊の季節の始まりである。

菊はもともと中国で生まれ、寒気に耐えて花開く姿から不老長寿をもたらす仙薬とされた。また文人に好まれ、高潔に生きる象徴として梅、蘭、竹とともに四君子と呼んで尊んだ。

古く日本に渡った菊の品種が爆発的に増えるのは江戸時代の園芸ブームによる。元禄8年の「花壇地錦抄」には250種あまりの菊が紹介されている。京都の寺院で催された「丸山菊大会(享保2年)」では143人が参加し380種の菊が集まった。菊栽培の技を競い合っていたことがわかる。

多様な菊をいけて楽しむ文化を後の時代にも繋げてゆきたい。





木賊と秋海棠
とくさ しゅうかいどう

△4頁の花▽ 仙溪

花形 生花 二種挿し

花材 木賊 砥草 (木賊科)

秋海棠 (秋海棠科)

花器 かいらぎ釉水盤 (木村盛伸作)

トクサとシユウカイドウは相性がいいように思う。共に湿気を好むところも似ている。トクサに細い分かれ枝がついている場合、生花にいきるなら取り除いたほうがいい。

横から見た奥行き





第52回 日本いけばな芸術展

会期 10月1日(火)～8日(火)

会場 東京日本橋高島屋

出品

4次展10月7日(月)～8日(火)

除真立花
のきしんりつか

桑原仙溪

花材

松(松科)

山帰来(猿捕茨科)

蓮華躑躅(躑躅科)

満天星(躑躅科)

柊(柊科)

貝塚伊吹(檜科)

寿松(松科)

鶏頭(苧科)

小菊(菊科)

花器

銅立花瓶



雪柳と水仙

△11頁の花▽ 仙溪

花形 生花 株分け

花材 主株 雪柳（薔薇科）

子株 水仙（彼岸花科）

花器 陶水盤

秋の菊と冬の水仙。どちらも、多くの植物が葉を落とし、地上から姿をいったん消してしまう淋しい時期に花を咲かせてくれる。菊の季節、水仙の季節を心待ちにして、今年も楽しませてもらえることに感謝したい。

水仙の生花は一種でいけて凛とした姿にするもよし、他の花や木と株分けにしてもいい。水仙は11月から2月初旬までいけられるので、取り合わせも色々楽しめる。雪柳の紅葉との対比が美しい。



山茶花の生花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 山茶花(椿科)

花器 煤竹竹筒

中庭に植わっている山茶花とはもう長い付き合いだ。今年も少し遅かったが咲いてくれている。小学4年生の頃から家元宅に住まわしてもらっているが、年々目の合う回数が増えてきた。一度意識してしまうと何度も見えてしまう。

幼い頃は、祖父が入った後の熱すぎる湯に浸かり火照った身体を冷ますと蔵の前に腰をかけ、明るすぎる夜空と中庭を見て過していた。湯冷めし風邪をひくこともあったが本当に好きな時間だった。熱すぎるお湯につかる事が身体にとって良くないことも知り、湯冷めをしたら風邪をひくことも学習したが、気がつく

と好きな時間が無くなっていた。今は日の出ている時間みる葉の陰りがとても綺麗に思える。

横から見た奥行き





ツルウメモドキ

仙溪

1985年8月下旬、「新進いけばな作家競作展」に辻田慶敬さんが出品したツルウメモドキの生花は今でも忘れられない。若い実と瑞々しい葉が茂り、3日間来場者を魅了していた。白リンドウを根締めにし、ピンクのデンファレとの二瓶飾りで、ツルウメモドキの葉色が際立っていた。



テキスト265号より

除真立花

△10頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 躑躅(躑躅科)

蔓梅擬(錦木科)

雪柳(薔薇科)

貝塚伊吹(檜科)

二輪菊(菊科)

小菊など5種(菊科)

花器 広口陶花器



稽古で立てた立花を十日後に撮影した。緑色だったツルウメモドキの実が弾け、二輪菊が大きく咲いていた。請と控枝は紅葉したキイチゴだったがユキヤナギに代え、胴の糸菊も小輪種にさしかえた。あれこれ工夫しながら長く楽しんでる。



蔓梅擬の生花

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 蔓梅擬(錦木科) 小菊(菊科)
花器 煤竹竹筒

柔らかい蔓は途中まで互いからめたり、別の枝を支えにしたり、ぐるぐる巻き付いたりしている。





啓翁桜の生花

△12頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 啓翁桜 (薔薇科)

花器 煤竹竹筒

桜は充分に寒さを感じてからでないと開花しない。冬が来るのが早い東北では、12月にお正月用のケイオウザクラが出荷される。

新春に一足早い春を楽しもうと、ケイオウザクラを生花にいかた。部屋の温もりで蕾がふくらんでゆくと、心も温かくなる。



師範会研修会

「寒桜の生花」

会期 11月24日(日)

会場 六角会館

参加 46名



あまり生花を稽古していない人も参加する研修会の花材としては、寒桜は難しかったかもしれないが、ゆつくり丁寧に枝を撓めて、とにかくなんとか三本で形にしてみました。

誰でもはじめから父の絵のようにいけられはしない。まずは少ない本数で、基本の形、役枝の出口の高さ、枝の撓め方、どうすれば足元を揃えられるかを身につけることが肝心だ。

寒桜と呼んでいる切り枝にはいくつかの品種があるが、「子福桜」が多いようだ。コフクザクラは中国原産のシナミザクラと日本のサクラ(コヒガン又はエドヒガン又はジュ

ウガツザクラ)との高配品種と考えられている。小輪の八重咲きで、花には雌しべが複数あって花一輪に二〜三個のサクランボができる。そのことが子宝に通じるとして子福桜と名が付いた。

秋から冬に少し花を咲かせ、春には再び多くの花が咲く。
ちなみに十月桜は八重または半八重で蕾はピンク色。冬桜は白色一重の花が咲くので見分ける目安に。





除真立花^{のましん}

水仙一色

仙溪

花材 水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

著我の葉（草蒲科）

花器 銅立花瓶

健一郎が卒論のテーマに「立花時勢粧」を選び、江戸時代前期、型を重んじる立花に異を唱えて、流祖が後世に伝えようとしたことを検証してくれた。

いけばなではまず初めに型通りにいけることを目指すけれど、型と技術が身についた先には志^ししたいでもっと奥の深い自然の妙^みを表現できる世界が広がっている。「植物が本来持っているものを損なわないようにしなさい。そうすれば自ずと花に自由を得ることができるよ」。流祖が一番伝えたかったのはこのことではなかったか。

今回、水仙の葉に針金を通さないで立花を立てたが、針金を通した葉とは明らかに表情が違う。いきいきしているのだ。いけた後もよく保ってくれる。大切な事を流祖に教えてもらった。



横から見た奥行き



蠟梅の立花

△3頁の花▽

仙溪

花材 蠟梅(蠟梅科) 松(松科)

菊(菊科) 椿(椿科)

枇杷(薔薇科)

花器 遊鑲耳竹節銅立花瓶

流枝の日光椿が華やきを添えている。



横から見た奥行き



五葉松の立花

△2頁の花▽

山本慶智

花材

五葉松（松科）

南天（目木科）

水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

紅柘植（柘植科）

石化柳（柳科）

小菊（菊科）

葉蘭（百合科）

天女文銅花瓶

指導 仙溪

南天の紅い小葉が胸で良く効いている。

横から見た奥行





満作の生花

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 満作 (満作科)

花器 饗餐文獣耳銅花瓶

枝いっぱい黄色い花が咲いている。太枝の立派なマンサクが手に入ったので生花にかけた。ほのかに甘い香りがあり、花も大きめなのでシナマンサクではないかと思う。

早春、ほかの花に先立って「まず咲く」ことからマンサクと呼ばれるようになったそう。一つの花には黄色い細長い花弁が4枚出るが、数個かたまつて咲くのもっと多くあるように見える。

冷たい山の中で満開のマンサクに出会ってみたい。きつと心を奪われるに違いない。

横から見た奥行き





ジャパンスピリッツ in
京都2020

△10頁の花▽ 仙溪

会期 12月29日～1月5日
会場 ホテルグランヴィア京都前
(京都駅ビル2階)

花型 生花 二種挿し
花材 蠟梅(蠟梅科)
椿(椿科)
花器 陶花器(阪野鳳洋作)



桜と躑躅の立花

△2頁の花▽ 仙溪

花材 桜(薔薇科)

躑躅(躑躅科)

松(松科)

椿(椿科)

都忘れ(菊科)

花器 銅立花瓶

白い花が清らかな印象のサクラである。葉は未だ出ていないのでマツで緑を添え、紅いツツジとツバキで赤みを加えた。蕾だった桜は満開に。京都の春の山景色。

横から見た奥行き





饕餮文の青銅器

△9頁の花▽ 仙溪

花型 草型 留流し
花材 山茶花(永木科)
花器 獸耳饕餮文銅花瓶

古代中国の王朝、殷・周の時代の彝器(宗廟に供える祭器で祭祀用の青銅器の総称)には、虎を見開きにしたような文様「饕餮文」が多く見られる。この睨みつけるような図像には、邪悪を避けて墓所を守護する願いが込められている。

サンシユウの枝先には生命の勢いを感じる。植物の力強さ美しさを表現するいけばなは、悪をはねのける清らかな力の象徴でもあると思う。



白川静「新訂 字統」より引用

横から見た奥行き





ニオイイリスの生花

△9頁の花▽ 仙溪

花型 行型 三花五葉
花材 ニオイイリス(菖蒲科)
花器 陶水盤

春の早い内から楽しめるアヤメ科の葉組ものにニオイイリスがある。花屋では(シロバナ)イチハツの名で売られるがイチハツではなく、地中海沿岸原産のジャーマンアイリスの仲間。古代ギリシャやローマの時代から香水に使われた植物だ。イリス(アイリス)はギリシャ語の「虹」から付けられた名前。一日も早く災いが去って明るい日が差し、虹が出てくれますように。



上御霊神社のイチハツ



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
6月号
No.684

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



二瓶飾り

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 二瓶飾り

花材 七竈ななかまど（薔薇科）

芍薬しやくやく（牡丹科）

花器 陶鉢一对（フランス製）

過去の「テキスト」では白黒写真だったので、カラーで再掲載。

株分けや二重切り、二瓶飾りなどは、枝ものと草花のとり合わせを楽しめて、季節を感じる生花になる。

（2012年6月 588号より）



タニワタリ
デンファレ

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け
花材 谷渡り (茶筌羊歯科)
デンファレ (蘭科)
花器 陶水盤

タニワタリは大中小と、大きさをとりまぜて使うことで生花になる。ただし、葉が大きくて足元も太くなるので、一種でいけても、よほど特徴のある器であれば面白い生花となるだろうが、普通の器にいかけても一種だけでは万年青や葉蘭のようなキリッとした風格を表現しにくい。家でいけて飾るなら、南国の鮮やかなランと株分けにするといいだろう。ランの色とタニワタリの緑が互いに引き立て合ってくれる。少し大きめの水盤がいい。





野萱草のかんぞう

〱11頁の花〱 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 野萱草(百合科)
花器 陶花器

立派なノカンゾウが手に入った。写真のような状態で、葉と花が株のまま切られて葉で括くくつてあった。解ほどくとそのままで格好がいいので、まず紫陽花と合わせて伸びやかに投入にいった。(12頁の花)

数日飾ったあとで、今度はノカンゾウ一種で生花にいかけてみた。初めていけたが、葉のねじれ具合がいい味を出してくれる。数輪あった蕾も順に最後まで咲いてくれた。葉先から黄色くなってくるが、程良くアクセントになっている。

カンゾウには一重咲きのノカンゾウと、八重咲きのヤブカンゾウがある。人家によく植えられて、若芽と花の蕾は食用になる。食べると憂いを忘れさせてくれるというので、ワスレグサとも呼ばれる。

いつか、稽古で普通にいけられるようになれば嬉しい。

カンゾウの葉で括くくられていた。





鉄線^{てっせん}の生花

△2頁の花▽ 仙溪

花材 鉄線3色(金鳳花科)
苔木

花器

耳付コンポート(宇野仁松作)

テッセンは自立しないので扱いが難しい。けれども頼れる場所を与えると、生き生きと咲いてくれる強さを持っている。

苔木を土台にしてテッセンをもたせかけながら生花にした。父から教わった私の好きないけ方だ。

苔木の風格も生かせる器を選んだ

朝鮮槿の生花

△4頁の花▽

仙溪

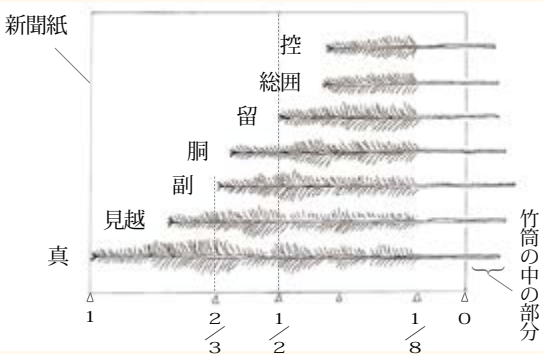
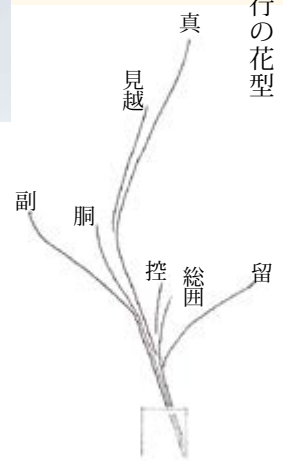
花型 生花 行型
花材 朝鮮槿(大槿科)
花器 陶花瓶(伊藤典哲作)

8月にいける生花といえはチョウセンマキで、長持ちするのが有難い。チョウセンマキはイヌガヤの変種から作り出された園芸品種で、日本にも朝鮮半島にも自生は無い。日本固有の栽培品種だそう。

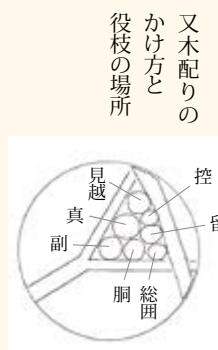


横から見た奥行き

◎行の花型



それぞれの枝の長さは左図のように新聞紙を基準にするとい。





河骨こうぼねの株分け生花

△ 5 頁の花 V 仙溪

花型 株分け生花

花材 河骨（睡蓮科）

花器 足付陶水盤（伊藤典哲作）

コウホネは池や沼、流れのゆるい小川などのやや浅い水底から生える。泥の中で横に伸びる白い根茎を白骨に見立てた名前だ。黄色い花が水辺の妖精のように咲く。

コウホネは必ず水揚げポンプで水を注入してからいけるが、長くはもたない。それでもいけたくなる魅力がある。

河骨の水揚げ





初秋の立花

△ 3 頁の花 ▽ 仙溪

花型 除真立花
花材 梅花躑躅(躑躅科)
数山査子(雪の下科)

雪柳(薔薇科)
檜扇の実(菖蒲科)

鶏頭(苧科)
童胆(龍胆科)

小菊(菊科)
花器 陶広口花瓶

夏の終わり頃から、色づき始めた葉や実物が花屋に出てくる。

真、副に使ったバイカツツジも艶のある葉が赤くなり始めている。ヤブサンザシの実はこのからだんだん赤くなってくる。秋風そよぐ季節ももうすぐだ。ユキヤナギで厚みを加えている。





唐胡麻と鶏頭とうごま けいと

△ 5 頁の花 ▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 唐胡麻 (燈台草科)
とうだいぐさ

鶏頭 2 種 (鳶科)
ひよこ

花器 陶水盤

トウゴマの大きな葉、小さな葉、微妙に色合いが違ふ葉に、赤く細い葉脈が伸びる。あまり保ちは良くないが、貴重な傷みのない葉は、見ていっただけで心地よい気分になつてくる。状態の良いトウゴマだったので、ケイトウと生花にいけた。





蜀黍 もろこし
龍胆 りんと

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 二種挿し
花材 蜀黍 (稲科)

龍胆 (龍胆科)

花器 飴色釉陶水盤

(2012年10月号より)

葉つきのモロコシ5本と龍胆4本の生花。こんなモロコシは最近お目にかかれない。





紫苑^{しおん}

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 真の花型

花材 紫苑^{しおん} (菊科)

花器 燻焼陶水盤 (矢野款一作)

(2008年10月号より)

紫苑の葉9枚と花3本の生花。花は真、胴、控に。初秋の花材として復活してほしい。





キミズミの実

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 黄実酸実の実（薔薇科）
花器 陶花瓶

（2009年11月号より）

以前、ウラジロノキの実として白黒写真で掲載したもの。いけた後すこし橙色に色づいてきたと書いているが、ウラジロノキの実は赤く熟すので、もともと黄色く熟すキミズミだったかもしれない。確信はないが今回はキミズミとしておく。

キミズミはリンゴ属。ウラジロノキはアズキナシ属。似た実のできる木は他にも色々ある。



ウラジロノキの花

出典：http://hanasan.dreamlog.jp/archives/52106298.html



キミズミの花

出典：http://www.okadanouen.com/zukan/kimizumi.html



タマミズキの実

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 玉水木の実(繡の木科)
花器 陶花瓶(清水保孝作)

(2012年11月号より)

タマミズキはウメモドキと同じモチノキ科の落葉樹で、静岡から南西諸島に分布する高木である。

ウメモドキより小さな実は、ややくすんだ赤色。

直立した幹から横枝が階段状に出て広がる樹形がミズキに似るがミズキの仲間ではない。

雌雄異株(雌木と雄木がある)なので両方の花の写真を載せておく。モチノキ科には雌雄異株の木が多いが、中には雌木だけでも結実するものもあるようだ。



タマミズキの花。雌花④、と雄花⑤。

出典：<https://matsue-hana.com/hana/tamamizuki.html>

出典：<https://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~main/index.php/> タマミズキ



柳行李

出典：http://ei4web.yz.yamagata-u.ac.jp/mogamigawa/life/yanagigour.html

柳行李は現在も豊岡でつくられている。節のない細く長い枝にするために頻繁に脇芽を摘んで育て、初冬に刈り取り、足元に水を絶やさず冬ごもりを終えたものが、晩春に皮をむかれてやつと細工の素材になる。行李柳は撓めやすい。いけていて細工に適していることを実感する。

奈良正倉院御物の中にも「但馬国産柳箱」がある。但馬国のコリヤナギ（杞柳）で編まれた杞柳細工が広まって、様々な行李がつくられ利用されて、コリヤナギはコウリヤナギ（行李柳）と呼ばれるようになった。

明治時代以降、筆筒が普及するまでは、行李（籠の箱）に服や物を収納していた。行李の材料として柳が使われたが、柳細工は2千年前に新羅から伝わったそうだ。

花器 煤竹竹筒

椿（椿科）

花型 生花二種挿 草型 副流し
花材 行李柳（柳科）

行李柳 椿

仙溪

万年青の生花

仙溪

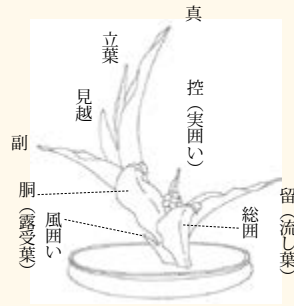
万年青（百合科）

常緑多年草。東海道以西の暖地の山地の林下に生える。

「都城（都尉）」は大型の葉に白い覆輪のある品種で、江戸時代から知られる薩摩おもとの代表品種。

常緑の葉と初冬から赤く色づく実を大切に扱い上品な姿にいける。実の茎に添え木をしておくと長く楽しめる。

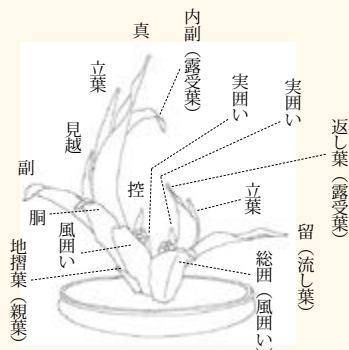
九葉一果



十三葉一果



十五葉二果





赤芽柳
あかめやなぎ

△ 6 頁の花 △ 仙溪

花型 生花 そうとめ 草型 留流し

花材 赤芽柳 (柳科)

花器 煤竹竹筒

この赤芽柳や前号の行李柳こうりやなぎの生花を美しくいけるにはそれなりの技術が必要となるが、それだけに綺麗に入ると嬉しい。技術は簡単には身につかない。何度もしけることしか近道はない。



臘梅 椿

△7頁の花△ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 臘梅（臘梅科）

椿（椿科）

花器 龍耳銅花器

ロウバイ（臘梅・蠟梅・蠟梅）は花を蜜蠟に見立てたり、臘月（旧暦12月）に咲くことから名前があるそうだ。中国原産で、「立花時勢粧」にはまだ記述がない。甘い良い香りがする。

作例ほどの古木はめったにいけられない。撓めが効かないので、役枝の選択が形を決める。良い曲がり方に助けられた。



春の除真立花

△3頁の花▽

仙溪

花型 除真立花

花材 山茱萸(水木科)

木瓜(薔薇科)

猫柳(柳科)

辛夷(木蓮科)

松(松科)

椿(椿科)

菊(菊科)

小菊(菊科)

葉蘭(百合科)

花器 銅立花瓶

4種類の花木に、松、菊、小菊を加えて春の立花の参考に立てた。

細い枝ばかりの場合、晒木か苔木を添えると景色に厚みがでる。それらがなくても、葉蘭や枇杷の葉があれば役枝の出口をしつかりした感じにできる。

前からは見えないが、人では腰のあたりに松と椿を出している。

躍動する生命力と、静かな水際が立花の醍醐味だと思う。奥が深い。





寒紅梅

△ 4頁の花▽

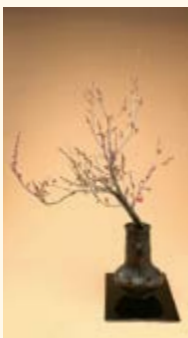
仙溪

花型 牛花 草型 副流し
花材 紅梅 (薔薇科)
花器 饗養文銅花器

1月中旬、健一郎夫婦が京都御所の梅林に写真を撮りに行っていた。すでに満開の梅もあつたそうだ。おそらく去年の暮れから咲き始めたのだろう。

寒中に咲く梅を寒梅と呼んでいる。寒中とは小寒から節分までのことを言い、寒の内とも言う。今年は1月5日から2月2日までの間が寒の内だ。

梅は寒さの中で咲くことが好きなのに違いない。そうすることが良い実を結ぶことを分かっているのだろう。寒さを楽しんでいるようにも見える。草木の中の君子と称えられるのも納得である。





彼岸桜の生花

ひがんざくら
△ 8 頁の花 ∇ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花材 彼岸桜 (ほら
すだけ 薔薇科)

花器 煤竹竹筒

彼岸桜に似る新しい品種らしい。
花がうまく咲かなかったが、まだ出
荷の試行錯誤中なのかな。桜をい
けて楽しんでもらおうと、様々にご苦
労されているのだと思う。





桜一色の立花

仙溪

花型 除真立花

花材 八重桜(舊微科)

貝塚伊吹(檜科)

鳴子百合(百合科)

花器 銅立花瓶

今年も桜の咲く季節が巡ってきた。数年前から各地に植えられているカワヅザクラが、2月のまだ寒い頃から先駆けとして目を楽しませてくれた後で、いよいよお待ちかねのソメイヨシノが一斉に咲き始める。ソメイヨシノは江戸時代末期に江戸の染井村で生まれた品種で、エドヒガンとオオシマザクラの雑種が交雑してできたそう。

エドヒガンには山梨県の神代桜や岐阜県の薄墨桜など、千年を超える長寿の桜があり、京都円山公園の枝垂れ桜もエドヒガンの仲間だ。人の寿命を遙かに超える大きな桜が人々の心に平安をもたらしてくれる。

大振りの八重桜を切り分けて、他に花を混ぜずに桜一色立花にした。





照葉椿
てりはつばき

△ 3 頁の花 △ 仙溪

花型 草型 内副流し

花材 照葉椿 (椿科)

花器 煤竹竹筒

テリハツバキの生花を部屋に飾っておいたら、いつのまにか花が咲いていた。葉色も様々な色に変わり、一重の赤い花と絶妙な色合いをつくっている。

いけてから一ヶ月経ち、葉も落ちはじめたものを撮影した。最初に撮った(写真⑤)のと比べると変化の具合がよく分かる。

このような鮮やかな景色はおそらく自然では見られないだろう。テリハツバキが私に密かに見せてくれた。そんな気がして喜んでいる。





木苺と撫子

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 木苺きいちじ「構苺」かじいちじ（薔薇科）

撫子なでしこ（撫子科）

花器 陶コンポート（モロッコ）

春に生まれた若葉もだんだんとすっかりしてきた。初夏の爽やかな空気を吸って、植物も人も心地よく伸びをする、そんな季節である。

作例は4月初旬にいけたものだが、キイチゴのまだ小さな葉が初々しい。このあと白い五弁花が咲いた。一種では少し物足りないので、白花のナデシコと株分けにした。

庭木がぐんぐんと伸びる季節。初夏の優しい花をつけた木々は、格別ないけばな花材になる。いずれ剪定するのなら、今切って部屋に置いて楽しみたい。そんな時の作例に。

ななめ横から見た奥行





初夏の杜若

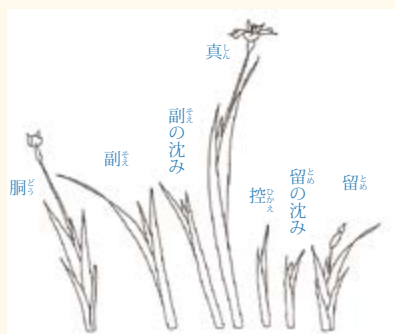
△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型 三花七葉

花材 杜若(菖蒲科)

花器 陶水盤

初夏のカキツバタは花を葉よりも高くして、葉にも動きをつけ、生き生きとした姿にしたい。花は真、胴、留に。いけ終えたら小石で剣山を隠して水を足す。





山野草の立花

△4頁の花▽ 仙溪

花型

除真立花
のきしんりつか

花材

京鹿の子(薔薇科)
きようかのこ

夏櫨(躑躅科)
なつはぜ

山紫陽花(紫陽花科)
やまあじさい

下野(薔薇科)
しもつけ

晒木
しやれぼく

花器 黒釉陶花瓶

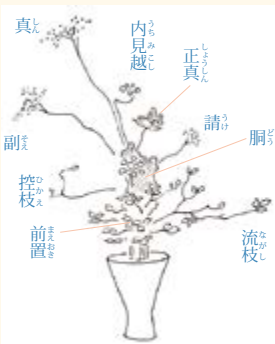
季節の草花を主材にした立花。

夏山で出逢った草木の記憶を
たどって立てた。

ナツハゼをいけるととき、登山
の途中で実を見つけて食べたこ
とを思い出す。酸っぱさが疲れ
筋の風通しのいい心地よい場所
だったのを覚えている。

さまざまな木々が山歩きを励
ましてくれる。そして奥山の開
けた場所に咲く花たちに感動す
る。

そんな気分が伝わりますよう
に。





裏白の木 芍薬

△5頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

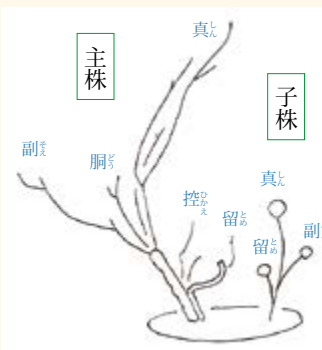
花材 裏白の木(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

花器 松樹天目深鉢

(木村盛康作)

鎌倉時代、中国の天目山からもたらされた黒褐色の茶碗が「天目茶碗」と呼ばれた。窯変天目や油滴天目が有名だが、京都の陶芸家、木村盛康氏は苦心の末に松の木肌のような模様を生み出し「松樹天目」と名付けられた。その松樹天目の大鉢に、山の木と里の花を株分けでいける。花たちも気持ちよさそうだ。平然と草木の命を受け止めてくれる懐の深い器。私に心地よい緊張を与えてくれる、ここ一番の大切な存在。いい器だ。





ヒオウギの姿を生かすこと。
加える葉はできるだけ少なく自然に。

花型 生花 行型
花材 檜扇 (菖蒲科)
花器 陶水盤

ヒオウギの生花
△3頁の花▽ 仙溪



夏の立花

△ 6 頁の花 ▽ 仙溪

花型 除真立花
花材 夏櫨 (躑躅科)

花材 笹百合 (百合科)

花材 檜扇 (菖蒲科)

花材 紫蘭 (蘭科)

花材 桔梗 (桔梗科)

花材 日向水木 (満作科)

花材 玉川杜鵑草 (百合科)

花材 河原撫子 (撫子科)

花材 紫陽花 (紫陽花科)

花器 焼締陶花瓶

花器 焼締陶花瓶

稽古の見本に立てた立花が 10 日経っても元気なので、胴・流枝・控枝・前置をいけかえて写真に撮った (7 月 7 日撮影)。

多くの木や草花が一つの器におさまって、なんともいえない風情が作られる。立花は実に不思議ないけばなだ。これからも植物たちによる調和の美を楽しみたい。





桑原専慶流

京の花物語・檜扇展示会 京都

会期 第4期

7月23日(金)～25日(日)

会場 祇園祭ぎやらしい

漢字ミュージアム1階

出品 桑原仙溪

花型 除真立花

花材 梅花躑躅(躑躅科)

檜扇(菖蒲科)

朝鮮槿(犬樫科)

仙翁(撫子科)

桔梗2種(桔梗科)

女郎花(女郎花科)

紫陽花「紅」(紫陽花科)

小葉の髓菜(髓菜科)

鳴子百合(百合科)

京都府花き振興ネットワークによる宮津産ヒオウギのPRイベントに、京都いけばな協会が協力して毎年7月の週末に2流派ずつがヒオウギのいけばなを展示している。各先生方の花とインタビューが後日数分のPR動画になって公開予定。



菊一色の立花

△5頁の花▽ 仙溪

花型 菊一色 除真立花

花材 糸菊(菊科)

スプレー菊(菊科)

小菊(菊科)

寒菊(菊科)

花器 陶花器

横倒しに育った菊が無い時は、作例のようなスプレー菊の小枝を整理するなど工夫すれば、自然な感じに立てることができる。茎を撓めたところはフローラルテープを巻いて乾燥を防ぎ、葉を長持ちさせたい。



横から見た奥行



除真立花 2作

花型 除真立花

花材 七竈 (薔薇科)

木苺 (薔薇科)

朝鮮槿 (犬樫科)

鶏頭 (萵科)

狗尾草 (稻科)

女郎花 (女郎花科)

竜胆2種 (竜胆科)

小菊 (菊科)

鼈甲柁木 (錦木科) 6頁

桔梗白花 (桔梗科) 7頁

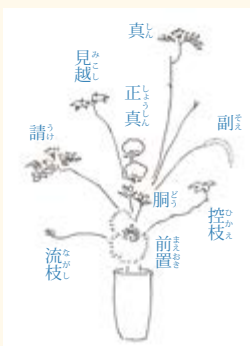
花器 陶花器

△ 6頁の花 △ 仙溪

稽古で立てた立花。同じ花材で健一郎が立てた立花と比べると自分の生真面目さがよく分かる。

真に深山の木ものを使っているのに、見越には山の梢を感じするような花材を選ばなかった。「見越」については「テキスト629」を参照ください。

△ 6頁の花 △





感謝の心で

仙溪

昭和4年、12世家元の13回忌を廬山寺で行い、13世と門人による「桑原富春軒塔」を境内に建立、以後当流の師範誓約式はこの記念塔の前でする事となり今日に至っている。

縁の廬山寺で「テキスト700号記念誌」の撮影を希望し、町田泰宣管長のご快諾を得た。

本堂の弥陀三尊は、臨終の際に浄土から迎えに來られた阿弥陀如来、觀音菩薩、勢至菩薩の三尊仏で、今回特別に間近で優しいお顔立ちを拝めて感激である。

御前に立花を供えらるゝと「益々精進せよ」と励ましていただけた気がする。



この銅器は13世が職人に作らせたもので、笛を吹き舞を踊る天女が表裏に彫られている。インド原産の鶏頭と草花を主にした供花で三尊仏に喜んでもらえたら幸いである。

草花立花

△4頁の花▽

仙溪

花型 直真立花

花材 鶏頭(草科)

通草(通草科)

草(稲科)

男郎花(女郎花科)

鳴子百合(百合科)

菊2種(菊科)

蓼(蓼科)

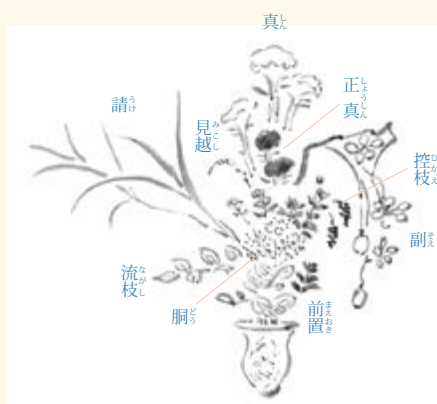
桔梗白花(桔梗科)

金水引(薔薇科)

花器 天女紋金赤漆銅花瓶

草花立花

△4頁の花▽



金赤漆銅花瓶 △4頁の器▽

13世の時代、「テキスト」の前には「龍膽(昭和11)」「挿花春秋(昭和24)」が発行されていた。挿花春秋13号に家元が天女を彫刻した銅器をデザインしたことが書かれている。伝統を現代に生かすことを考え、試作を重ねてできた2つと無い貴重な器である。



↑銅器に彫られた天女の図。
←挿花春秋 18号に同じ天女図が。



ブルーベリー

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花^{せいめ} 草型^{そう} 副流し^{そえ}
 花材 ブルーベリー (躑躅科)
 花器 獸耳陶花器

葉が紅葉したブルーベリーの枝。暴れた味のある枝だったので生花にいかけてみた。型に納めるのに苦労したが、ブルーベリーの野性味を感じることができた。

アメリカ北東部にイギリス人が住み始めた頃、その厳しい氣候のため持ち込んだ農作物は育たず飢えて苦しんだそうだ。それを救ったのはトウモロコシの育て方や野生植物の採取や保存法などの先住民インディアンに教わった知恵で、中でも重要だったのが広範囲に自生していたブルーベリーだった。実はもちろんのこと葉や根を煎じたお茶も愛飲された。

ブルーベリーの実が夏の間に熟すのは知っていたが、その後こんなふうに葉が色づくとは知らなかった。いけばなは植物を知る入口の一つである。



米梅の立花

鹿王院 韋駄天像前

△4頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花
のきしんりつか
こめつが

花材 米梅(松科)
きりしんりつか
しやれぼく

霧島躑躅(躑躅科)
しやれぼく
晒木

花器 遊環耳銅立花瓶

後ろに居られる韋駄天様は俊
足で僧坊の守護をされている。
遙か遠くの深山の樹を立て、供
養させていただいた。



深山砂物 鹿王院茶室

△5頁の花▽ 仙溪

花型 砂の物

花材 錦木(錦木科)

天南星(里芋科)

甘野老(百合科)

笹竜胆(竜胆科)

藤袴(菊科)

白花杜鵑草(百合科)

下野(薔薇科)

紅羊齒(雄羊齒科)

花器 銅砂鉢

掛物 藤井隆也作

普段非公開の大河内傳次郎寄
進の茶室。珍しい実や一足早い
紅葉を床の間に。もてなしの花。



行李柳

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 行李柳(柳科)

花器 煤竹竹筒

行李柳の生花は櫛くしでといったようにというのが理想だが、途中で枝分かれたものを混ぜながらその姿を生かすなら、多少の枝の交差には目をつむり枝が持つている勢いを表現したい。

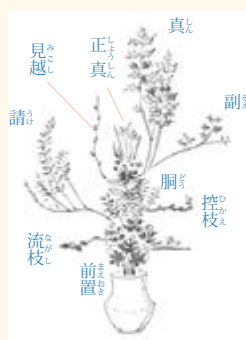


晩秋の立花

△7頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 柊(木犀科)



昨年晩秋に稽古で立てた立花。テキスト1月号掲載の立花と同じ花材なので見比べてほしい。お手本として立てたもの(今回)と自由に模索しながら立てたもの(1月号)。どちらが優れているのかではなくて、立花を立てる時の姿勢としては、1月号のような自由な心でいたい。

花器 陶花器

小菊(菊科)

寒菊(菊科)

赤芽柳(柳科)

椿(椿科)

鳥不止(目木科)

水仙(彼岸花科)

雪柳(薔薇科)

若松生花

仙溪

花型 生花 真型
花材 若松（松科）
花器 青竹竹筒

今年もそろそろ新しい年を迎えようとしている。12月の中旬からお正月花の稽古が続く。ソーシャルワーカーの人達はおそらく花をいけるどころではないだろう。コロナ禍にあっても稽古ができることに感謝しよう。

◎ 枝を選び、それぞれの長さに切り、足元の葉を取り除き、木肌を美しく磨く。

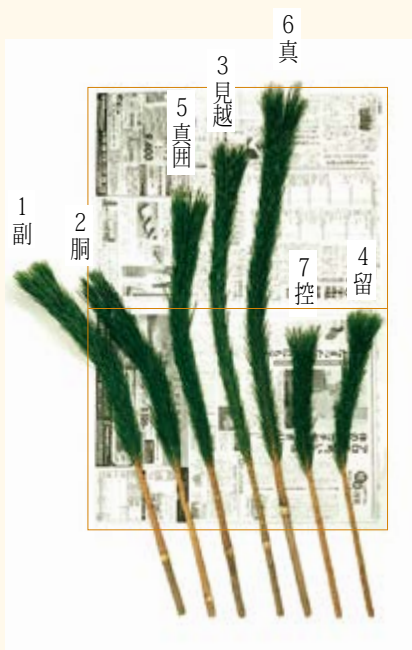
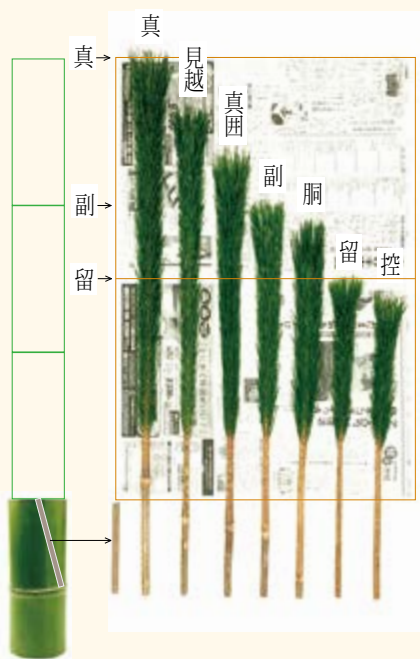
◎ それぞれ撓めて形をつける。数字はいける順番。



◎ 横から見たところ
真の先は足元の真上に。



◎ 又木配りのかけ方
◎ 役枝を入れる順番と位置



昨年、宅配稽古に添えるために若松生花のプリントをつくったので、ここに掲載しておく。飾る場所によって右勝手、左勝手を決めてからいけること。

竹筒（9寸＝27センチ）の3倍と新聞紙の幅がほぼ同じなので、新聞紙を広げた幅が真の水際からの長さとなる。

副は真の3分の2。留は真の2分の1。

これらの長さに水際から下の長さを足して切る。

諸木の中に松の緑は四季に変わることがない。このことから祝意の生花としていけられてきた。慶事の花として、神への供え華として、清浄純粹な心でいける花である。

切り立ての清々しい青竹の筒に若松7本を「真の花型」にいけ、水際に紙を巻き、金銀の水引を「ともえ結び」にする。

真塗りの蛤板、または白木の板を敷いて飾り、紙が濡れないようにやや少なめに水をはる。





霧島躑躅の生花 仙溪
きりしまつづじ

「紀の国わかやま文化祭2021」の「いけばな芸術展」にご招待いただき、関西の先生方と共に和歌山城ホールに花をいけてきた。(11月13日～14日)(写真④⑤)

ガラス越しにお城を見る素晴らしい空間で、イチヨウの黄葉を背景に季節外れのツツジの花が映えていた。

偶然にもツツジは和歌山市の花だそう。ちなみに和歌山県の花はウメ。お土産に梅干しを頂戴した。美味しく頂きました。



水仙 金盞花

△12頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 水仙(彼岸花科)
副株 金盞花(菊科)

花器 陶水盤

キンセンカは冬から春に咲くヨーロッパ原産の花で、古くから栽培され立花時勢粧でも「水仙一色」の前置にホンキンセンカ(一重咲き小輪)が使われている。(テキスト676参照)

花色がスイセンと良く合っている。上品ないけ方で、温かな色を楽しみたい。





共に作る

△5頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 賢翁桜(ばら薔薇科)

花器 煤竹竹筒

生花の型には華道が生み出した普遍的な美しさがある。手にした花材で美しい姿を作るわけだが、いけ終えた後も次々花が咲いてくれるのが理想だ。形を作る時、花材によって力加減や撓め方を変える勘が必要だが、花の協力を得て共に作るという謙虚な気持ちを持つていたい。





ニオイイリス

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型

花材 ニオイイリス (菖蒲科)
(あやめ)

花器 金属装飾陶水盤

(モロッコ製)

いけばな花材にアヤメの仲間が多い。日本のカキツバタ、ハナシヨウブ、シヤガ、ヒオウギもアヤメ科だ。洋種では細い葉を広げるアイリス（オランダアヤメ）は春の花木との相性がいい。最近ではトルコ周辺原産のオクロレウカ（長大アイリス）の花もよく見かける。フリージア、グラジオラスもアヤメ科。

それらに先駆けて早春にニオイイリスが咲く。地中海沿岸原産で芳香があり根茎から香料をとるのでこの名がある。白い花色に気品を感じる。この花を元にした紋章が長くフランス王家で使われてきたそうだ。西洋の花を東洋の感覚でいけた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
4 月号
No. 706

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花の芸術

ART OF FLOWER

立花時勢粧333年

3月2日〜7日

大丸ミュージアム〈京都〉



富春軒桑原仙溪が著した花伝書「立花時勢粧」。その中に「木の天然自然に従ってその生まれ持った生きる働きを導く」ことが挿花の極意とされる箇所がある。そんな気持ちでこの桜の老木を立てた。皆さんが毎日水を入れ替えてくれたお陰で、居心地良さそうに花を咲かせ葉を広げ続けて見事な景色を見せてくれた。幅4m弱の花をやすやすと支える器も良かった。この器なくしてこの花は成し得ない。手に入れておいてくれた天国の両親に感謝している。仙溪

桜一色立花 桑原仙溪（十三世家元）

花材／本桜（薔薇科） 卜伴梅（椿科）

花器／白軸彩泥花器 市川廣三

花の芸術

ART OF FLOWER

立花時勢粧333年

3月2日〜7日

大丸ミュージアム〈京都〉



桜一色立花 桑原仙溪（十三世家元）

花材／本桜（ほんざくら 薔薇科）ト伴椿（ぼくはんつばき 椿科）

花器／白釉彩泥花器 市川廣三



富春軒桑原仙溪が著した花伝書「立花時勢粧」。その中に「木の天然自然に従ってその生まれ持った生きる働きを導く」ことが挿花の極意ととれる箇所がある。そんな気持ちでこの桜の老木を立てた。皆さんが毎日水を入れ替えてくれたお陰で、居心地良さそうに花を咲かせ葉を広げ続けて見事な景色を見せてくれた。幅4m弱の花をやすやすと支える器も凄かった。この器なくしてこの花は成し得ない。手に入れておいてくれた天国の両親に感謝している。 仙溪



第 73 回
華道京展 ～花と遊ぶ～

会期 4 月 7 日(木)～ 12 日(火)

会場 大丸ミュージアム〈京都〉

コロナウィルス感染拡大の影響により 2 年前には中止、
昨年は二条城の野外展示に切り替えたので、大丸での開催
は 3 年振りとなった。各期最終日は 3 時閉場にしたが、6
日間で 7 千人を超える来場があった。

いけこみ時のリスクを減らした

桑原仙溪

蘭の立花 バンダ、オンシジウム、サンセベリアほか

器：瓷器 木村展之



鼈甲^{べつこうまさき} 生花

△ 4 頁の花▽ 仙溪

花型 行型

花材 鼈甲^{べつこうまさき} 生木

花器 煤竹^{すすだけ} 竹筒

マサキは常緑低木で日本列島に広く分布している。葉の大小、葉色やその濃淡、斑入りなどいくつかの品種がある。

マサキ、オオサカベッコウマサキ、キンマサキ、ナカフキンマサキ、ギンマサキ、オウゴンマサキなどが緑化植物として公園に植えられたり生け垣に使われている。

いけばなではクロヒメマサキやベッコウマサキを生花にしているが、ベッコウマサキは明るい緑と黄色が美しいので、生花にいたった残り枝を盛花や投入、一輪挿しに利用できる。

写真のベッコウマサキは伸びた細枝を生かしてつけたが、手にした枝にボリュームがあるなら、それを生かせばいい。





ピレアホルン

△5頁の花▽ 仙溪

花型 真型 二種挿し

花材 鉄砲百合（百合科）

スプレー薔薇（ばら 薔薇科）

花器 陶水盤（伊藤典哲作）

4月に稽古の見本でいけたものだが、ユリの季節の生花として参考に記載しておく。

テッポウユリを真、見越、真囲、副、胴に立て、スプレーバラを留と控に加えた。

ユリはピレアホルンという品種で、よく締まった葉がびっしりつき、小ぶりの花はとても良い香りがした。ユリもバラも撓めずにいけている。剣山にさす位置を工夫して、足元をできるだけ細く見せている。

蕾の時の姿は先月号のレモンちゃんの写真で見てもらえる。花が咲きそろったあと茶色く枯れるまで、葉はずっと美しかった。





檜扇
ひおうぎ

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花^{せい} 株分け
花材 檜扇^{あやめ} (菖蒲科)
花器 陶水盤

古来その姿と漆黒の実によって烏扇^{からすおうち}と呼ばれ、扇^{あお}ぐ風で疫病を退散させた。檜扇と呼ぶ今も祇園祭には疫病退散の願いをこめていけられている。今年は3年ぶりに山鉾巡行が行われる。



ヒオウギの実
(ヌバタマ)

<https://beyond-ecophobia.com/belamcanda-chinensis/amp/>



上から見た奥行



トルコ桔梗 ききょう なでしこ 撫子

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 トルコ桔梗(竜胆科)

美女撫子(撫子科)

花器 陶水盤

手毬のような花はビジョナデシコで、ヨーロッパロシア西部に自生する多年草。ヒゲナデシコとも、何故かアメリカカナデシコとも呼ばれる。トルコキキョウはアメリカ原産。これらを株分けでいけて床の間に飾り、ブルーが鮮やかなトルコの細密画を掛けた。

この花たちのように世界の国どうしがより良い関係を築けますように。





虫狩^{むしかり}の実 菊

△2頁の花▽ 仙溪

花型 草型副流し 二種挿し

花材 虫狩

(忍冬科・連福草科)

菊(菊科)

花器 陶花瓶(伊藤典哲作)

ムシカリは葉を亀の甲羅に見立ててオオカメノキ(大亀の木)とも呼ばれる。初夏ガクアジサイに似た白い花が咲き、晩夏赤い実が黒く熟すころ花柄は赤く変色している。先日山で見たミズキの実も花柄が赤く、遠目では赤い花のように目立っていた。実の存在を山の動物や鳥たちに知らせるための知恵だろう。



菊 2 色

△ 3 頁の花 △ 仙溪

花型 真の花型

花材 菊（菊科）

花器 陶水盤

水盤に剣山でいけている。比較的粘り強い茎だったので、留・総囲・控は慎重に撓めている。真・新囲・副・胴は撓めずにいた。

菊の季節がやってくる。菊は花の品格を引き出し、葉をシャキッと見せたい。

葉蘭 はらん 九葉 生花 行型

葉蘭は中国原産の多年草。地下茎から1枚ずつ葉が出る。
最初は巻葉で伸び出てくる。巻葉の外側が内側よりも太陽光を多く受ける分、幅が広くなり、開いた葉では左右で幅が違う。右巻き左巻きの両方がある。
美しい姿形になるよう葉を選べば自ずと両方の葉が必要になる。
左右同数大中小の葉を多めに用意した中から葉を選んでいけすめる。



新囲と見越はどちらを高くしても良い。



又木配りは小さめ
にかける。



葉にもよるが、一番大きな葉を真に選んで、
中程で茎をしごくように撓めておく。控・
胴沈みには小さい葉を残しておく。胴沈み
のかわりに副沈みでもよい。



◎ いける順番や入れる場所はそのつど工夫する。横配りはしっかり強めにかける。



葉蘭九葉^{はらん}

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型

花材 葉蘭（百合科）

花器 煤竹竹筒^{すすだけ}

葉蘭は足元を切ることにはあっても葉先を切ってはならない。葉の大小、葉のくせをよく選択してその組みあわせ方を工夫し、流麗な形を作りあげる。

葉の形は同じようで同じでない。それぞれに「くせ」があり、花形の中で用いる場所を考えるわけだが、なかなかこれが難しい。数多くいけて様々な葉の扱いに慣れ、形作するための技巧を身につける修練が必要となる。いろいろ工夫するうちに、自分なりのコツを掴める時がある。そんな積み重ねが葉蘭の生花には必要である。





秋草と色づく葉

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 更科升麻(金鳳花科)
丁字草(夾竹桃科)

木蓐(薔薇科)

花器 陶水盤

サラシナシヨウマの自然な曲がりを生かして生花にいけた。2種の葉色がいい景色になつてくれた。





梅擬除真立花

△ 7 頁の花 △

花型 除真立花

花材 梅擬 (繭の木科)

松 (松科)

伊吹 (檜科)

龍甲 柃木 (錦木科)

見返り草 (紫蘇科)

大文字草 2 種 (雪の下科)

斑入り紫蘭 (蘭科)

杜鵑草 (百合科)

寒菊 (菊科)

花器 天女紋銅花器

日本 いけばな芸術展出品作

桑原仙溪

梅擬の生花と立花。実の小さなものは滅多にいけられない。折れやすいので、太くてひねた枝のどこが生花の真、副、留になるかの見極めが肝心だ。引き締まった水際が作れば、水面から立ち昇る生花特有の美しさが生まれる。

立花には梅擬の伸びやかな細枝を真に立て、松の緑と季節の草花を取り合わせた。ぐるぐると捻れた松をどう見せるかに悩んだが、様々な方向へ出た花材の調和が立花の見所であり醍醐味だ。多種の花材を調和させる



ことができる立花という様式の不思議さ。それを生み出し、自然の妙味を味わい尽くした先人は、会得した物を花伝書に残している。いけばなは今もその延長線上にある。

梅擬の生花

△ 6 頁の花 ▽

日本いけばな芸術展出品作

和田慶千

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬（繡の木科）

花器 銅薄端

指導 仙溪